

# 荒れ野

桑原裕子

【登場人物】

窪居藍子(くぼい・あいこ)57歳、主婦

窪居哲央(くぼい・てつお)58歳、会社員

加胡路子(かご・みちこ)57歳、調剤薬局勤務

窪居有季(ゆき)29歳、藍子と哲央の娘

ケン一(けんいち)39歳、日雇い

石川広満(いしかわ・ひろみつ)72歳、無職、元教員

【脚本に登場する記号について】

\*………舞台袖で発する台詞

## オープニング「シュレディンガーの猫」

1

暗闇に聞こえるサイレン。消防車、救急車が行き来する様子が、壁を隔てて遠くから聞こえてくる。轟々と風が唸る音や、炎がはぜる音も聞こえる。

12月半ばの日曜日、夜23時半。

の市西町にある集団住宅「西の森団地」のロ棟㊦階に位置する、加胡路子（かご・みちこ）の家。

舞台となる居室は、2Dスのアパートの居間にあたる畳敷きの∞畳間。舞台上手手前にダイニングキッチンや洗面所、玄関に続く入口。下手前にベランダ、上手奥側は隣室に続く。

飾り棚、テレビ台など古い型の調度品が壁に沿うように並んでいる。テレビは昔ながらのブラウン管で、今は使用していないのか、布がかけられてあり、積み上げた雑誌や小物がテレビ台の上を占めている。

畳の上にはカーペットが敷かれ、本来はその中央に据え置かれているはずのコタツ台は部屋の端に追いやられて、代わりに布団が一組敷かれている。

明かりの消えた部屋。端に置かれた円柱型の石油ストーブが鈍い光を放つ中、ひと組の布団に三人の男女が横たわっている。

ただし、一番窓際に寝ているケン一（けんいち）は逆さまに寝そべり、上半身だけを布団に預けて、下半身はコタツにつっこんでいる。

真ん中で寝ているのは路子。寝間着用の長いワンピースにカーディガンで、布団に潜り、テラス窓の向こうを眺めながら、誰に聞かせるでもなく歌を口ずさんでいる。

嫌われてしまったの 愛する人に

捨てられてしまったの 紙くずみたいにな

路子と背を合わせるように横たわる老年の男・広満（ひろみつ）は、ストーブの明かりをたよりに週刊誌を読んでいる。ケン一も寝転んだまま、路子の歌に合わせて歌う。

わたしのどこがいけないの それともあの人が変わったの

遠くで小さな爆発音が聞こえた。いったん路子とケン一は歌を止めるが、やがてまたどちらからともなく再開する。広満がよたりと身体を起こし、傍らにあったどてらを羽織って窓の方へ向かう。

残みねづしまったの 雨降る町に

致しみの目の中を あの人を逃げる

路子 開けたら煙いよ。

あなたなぶぶぶする ああなたなぶぶぶする

ブランダに出て行く広満。コタツ台の上にあった携帯電話がバイブする。ケン一が手に取り、路子に差し出す。着信相手を確認し、電話に出る路子。

路子 はい……ああ、もしもし、藍子ちゃん？

あなたなぶぶぶする 泣くの巻くの死んじや

路子 (歌うケン一を制して)ううん、起きてた。うん……ああそうだよ  
ね。(窓を見て)うん、少し見える。大丈夫？うん……、

路子は電話をしながらキッチンの方へ入っていく。

広満 また爆発したよ、なんか。

ケン一 ……、

広満 追いつかないんだろうよ、風向きが変わったら。こつちを消してもあっち、あっちを消したらまたこつち。野次馬もつられてワー

ツと移動して…必ずいるよ、見に行っただけなのに煙でも吸って具合の悪くなる馬鹿が。見に行くか。

ケン一 (起き上がる)

広満 お前も馬鹿に混じるか？

ケン一 …。

広満 他所様の不幸をのぞき見したいのは本能だよ。だからってわざわざ不幸を浴びに行くことはないの。遠くで見るのが良いよ。そんでさ、想像してご覧。全員逃げたかな、それとも誰か死んだかな。

ケン一 (歌い)泣ーくの歩くの死んじゃ、

広満 ”シュレディングーの猫”というやつだよ。小さい箱にな、猫を入れる。そこに放射性物質が90%の確率で放射する機械と、その物質を感知したら毒ガスを出す機械を入れておく。一時間後、猫は死んでるか、生きてるか、確率は半々。見に行ってみないとわからないな？

ケン一 …。(頷く)

広満 つまりそこには、生と死が重なり合ってる。どちらか一方じゃない、箱を開けない限りは、生と死がどちらも同時に存在するということ。それって面白いだろう。

電話をしながら、路子が戻ってくる。キッチンは寒いのか、ストーブに当たりに行く路子。

路子 じゃあ待ってるね。はい。ううん、はい。(電話を切る)

ケン一 自分じゃ逃げられんの？

広満 うん？

ケン一 猫。

広満 うん。

ケン一 かわいいそうやね。

広満 そういう話じゃねえんだよなあ。

路子 寒いよ。(閉めて、という手振り)

広満 (戻ってきて)どうかした。

路子 友達がね、来たって。

広満 今から？

路子 家があのでね、燃えちゃうかも知れないんだって。

広満 ああそう。

ケン一 箱から出てきたね。

広満 ん？

ケン一 猫。

広満 そうだな。

路子 うん？

広満 たたむ？

路子 いい？

布団をよけ、コタツを移動する三人。また歌い出すケン一。

**あなたならどうする あなたならどうする**

**箱を開けるの 死んじゃうの**

路子 なあにそれ。

**あなたなら あなたなら**

歌いながら部屋をかたづけける三人。

## 第一場「防災頭巾」

30分後。アルミ素材の防災頭巾をかぶった窪居哲央（くぼい・てつお）が一人、居所がなさそうな様子で佇んでいる。足もとには旅行バッグ。

布団はたたんで脇に寄せられ、急場で中央にしつらえたコタツは向きが斜めに向いており、天板がずれている。

台所から、路子が食器を出すカチャカチャという音が聞こえてくる。

哲央はずれたコタツの天板を指先で押し、正しい位置に戻そうとする。

路子　お茶しかないんだけど、

哲央　ああ、すいません。

が、コタツ布団自体もずれていることに気づき、土台から直そうとする哲央。天板を外すと、下から傾く土台を支えていたらしい雑誌や文庫本などが出てくる。異国の娼婦が表紙の文庫本、青年漫画雑誌、いかがわしげな週刊誌など。潰れた煙草の箱なども出てくる。煙草の箱や漫画をつまみ上げて眺め、改めて部屋を見回す哲央。部屋の隅の、積み上げられた布団や洗濯物を眺める。

路子　（奥から）散らかってごめんね、

哲央　いや。

急いで漫画本や煙草の箱を元に戻し、天板を直してテラス窓を見る哲央。やがて、路子が盆に急須と茶碗を乗せ、部屋に入ってくる。

路子　見えるでしょ結構、

哲央　ああ、

路子　ここからも。

哲央　煙がすごいな。

路子　おうちは見える？

哲央 うち？いや……ここからはわからない。(指さして)裏側だからさ、ウエストランドの。

路子 宇宙人みたい。

哲央 え？

路子 (頭巾を示す)

哲央 ああ、(頭巾を脱ぐ)忘れてた。

路子 火の粉が舞ってた？

哲央 や、家出るとき、かぶらされて。震災の時買った奴。

路子 ああ。

哲央 (苦笑し)これでタクシー乗っちゃったよ。

路子 (笑い)え、タクシーで来たの？

哲央 ああ、うん。

路子 近いのに。

哲央 ……10時過ぎくらいだったかな、いきなり消防車が何台も来て。

路子 うん、

窓の前に並んで立つ路子。

哲央 最初は小火(ぼや)くらいの大きさだったらしいんだよ。ウエストランドの、去年つぶれちゃった洋服屋、あの、なんとかなんとか……、

路子 オールドネイビー？

哲央 そう、そのオールド……の、向かい側に、イベントやるような広場があるでしょ。

路子 ああうん、

哲央 あの辺りで火が出たらしい。で、消防車が来てすぐにでかい音がしてさ、

路子 爆発？

哲央 聞こえた。

路子 最初のかわからないけど、何度かあったでしょ？



哲央

うん、フードコートのプロパンにでも引火したのかな。そこから  
はもう、一気に火の手が上がって、煙が家の中まで入ってきて、

7

路子

いやあ…でもまだ燃えてないんでしょう？

哲央

え？

路子

お家…、

哲央

多分…うん多分。

路子

でも、とにかく命はね(助かった)。

哲央

うん、命は。

路子

うん。

路子は茶の支度を始める。

哲央

そこはほんと、良か(った)、

路子

(茶筒を空け)いやだ、

哲央

やだ？

路子

お茶っ葉切れてたんだ。

哲央

ああ、

路子

買ってくる。

哲央

いいよわざわざ、

路子

喉渴いたでしょ？煙も吸ったし、

哲央

水かなにか、

路子

ここの水飲めないもの。

哲央

ああ、

路子

何にもないのようち。あ、ビールは少しあるかな、

哲央

ビールか。

路子

そんな気分じゃないよね。いいの、買ってくる。

哲央

じゃあ俺が行くよ、

路子

いっつし。

哲央

遅いし。

路子 藍子ちゃんのそばにいてあげないと。

哲央 ……

路子 すぐだから、ちょっと休んでて。

路子は隣の部屋に上着を取りに行く。

\* 路子 (奥から)あそうだ、今お風呂ね、

哲央 さすがに風呂までいいよ。

\* 路子 や、

哲央 ただでさえ押しかけて迷惑かけてるのに。

\* 路子 ううん、それは全然かまわないんだけど、

哲央 あいつが行こうって。

\* 路子 え？

哲央 ……俺は、迷惑だよって言ったんだけど…勝手に電話しててさ、君んとこ。

路子 (上着を取り戻ってきて)……

哲央 俺から言い出したわけじゃないの。

路子 ……頼ってくれて嬉しい。

哲央 (布団を見て)……もう寝てた？

路子 ううん。まだ。

哲央 遅くに悪かったね。

路子 (首を振り)……お茶(買ってくる)、

哲央 (頷く)

路子 あそれでね、

哲央 (同時に)俺の家、

路子 え、

哲央 あ、

路子 ごめん、なに？

哲央 いや…俺の家…なくなっちゃうのかな…。

窓の外を見る哲央。路子が背中をさすると、俯く。

哲央 いやごめん、ごめんごめん。

路子 ……向こうの部屋に、仏壇があるんだけどね。

哲央 え、

路子 父の。

哲央 ああ、うん。

路子 出るの。

哲央 え？

路子 出るのよ。

哲央 え？なに。お父さん？

路子 だからあっちで寝られなくなっちゃってね。

哲央 ええー、そんな…（笑うが）ええ本当に？

路子 行ってみる？

哲央 や、

路子 （笑う）怖くはないのよ。気配感じるだけだから。

哲央 俺は怖いよ、

路子 ただ向こうで寝てると、

哲央 ちょっとねえ、

路子 寂しくて。

哲央 （頷く）…あとでお線香あげていい？

路子 もちろん。ありがとう。

哲央 お葬式も行かれなかったし。

路子 ……たいして知らせなかったから。

哲央 おじさんにはよく遊んでもらったな。

路子 そうだったね。

路子はテレビ台の引き出しから新品の線香の箱を出す。

路子　これ開けて。

哲央　いいの？新しいやつ。

路子　最近お線香もあげてなかった。

哲央　だからお父さん、出るんじゃないの。

路子　そっか。

玄関のインターホンが鳴って、哲央は飛び上がった。

路子　はい、(哲央に)藍子ちゃんかな、

哲央　ああ、

路子　(笑って)ビックリして。

玄関の鉄扉が開く音。

\* 藍子　ごめんください、

哲央　なにか言いかけなかった？

路子　なんだっけ。

哲央　さつき、

藍子　路子ちゃん？

路子　はいはい、

玄関へ向かう路子。哲央も追いかけるが、コタツ布団に貼り付いているもの気づき、立ち止まる。玄関の方では路子に会った藍子が嘆声をあげている。

\* 藍子　ああみっちゃん、

\* 路子　藍子ちゃん、大変だったね、

\* 藍子　ほんとにごめんなさい。

\* 路子 どうして謝るの。  
\* 藍子 遅い時間に、突然、  
\* 路子 そんなの。びっくりしたでしょう、  
\* 藍子 ほんとに信じられない。

哲央がコタツの上のものを拾い上げると、男物のボクサーパンツ。

\* 路子 有季ちゃんは？  
\* 藍子 今向かってる。まだ家の近くにいるのよ。  
\* 路子 どうだつて？  
\* 藍子 あんまりわかんないって、近づけなくて。  
\* 路子 そうねえ。  
藍子 もうすごいよほんとに。パトカーや消防車や、何十台も。  
路子 奥入って、ここ寒いから。

哲央はパンツを部屋の隅の目立たない場所に投げた。窪井藍子（くぼい・あいこ）が路子に肩を抱かれるようにして入ってきた。藍子もまた、銀色の防災頭巾をかぶっている。

藍子 ニュース見た？  
路子 うちテレビ壊れてて。  
藍子 ああ……。  
哲央 おう、  
藍子 おうじゃないわよ、大変だったんだから。  
哲央 有季どうかした？  
藍子 そうじゃないよ、電話が親戚中から切っても切ってもひっきりなしにかかってきて、

哲央 ああ、  
藍子 数子叔母ちゃんとか、仁田の家とか、みんなニュース見たつて。あなた電話どうしたの？

哲央 忘れてた。

藍子 あなたが繋がらないから、全部私に来て。ハルおじさんなんかしつこくかけてくるから、着信拒否した。

哲央 しちゃダメだろ、

藍子 茂雄さんもただこおばちゃんも、よしくんなんか、

哲央 親戚の名前全部言うことないから。

藍子 うちになんかあったと思って避難所行こうとしたってよ。

路子 避難所？

藍子 その西の森小学校。何人が集まってるみたい。

路子 そう、

藍子 ちは路子ちゃんがいってくれて、本当に助かったわ。ねえ？

哲央 うん？（釈然としないが）んあ…、

藍子 （上着を見て）どこか行くの？

路子 買い物、何かほしいものない？

藍子 （首を振る）ほんとに「ごめんなさい」。

路子 謝らないで。行ってきます。

藍子 みっちゃん、

行こうとする路子を、藍子が掴む。

藍子 ありがとう。

路子 ……久し振りだね。

藍子 ……。（頷く）

路子は涙ぐむ藍子をなだめるように撫でて座らせ、外に出て行く。

閉まる鉄扉。息を整えるように大きく嘆息して座り込む藍子。

哲央 頭。

藍子 ……え？

哲央 (頭巾を示す)

藍子 …(頭巾を触り)ああ、

哲央 (笑い)忘れてた？

藍子 うん…。

哲央 …え脱がないの？

藍子 この部屋寒い。

哲央 入りなよ。

遠慮がちに藍子はコタツに移動する。

哲央 (笑い)宇宙人みたいだぞ。

藍子 …は？

哲央 (首を振り)…有季来るって？

藍子 うん。

哲央 叱ったの？

藍子 そんな年じゃないでしょ。ここの住所メールしたら、やっぱり行くって。

哲央 それがいい。ファミレスで一夜明かすなんてダメだよ。

藍子 ギリギリ見えるんだって、ジョンサンから家が。

哲央 見えたって…どうにか出来るわけじゃないんだし。

藍子 うん。

哲央 明日も仕事あるんだから、少しでも寝た方が良くよ。

藍子 仕事？

哲央 休めないだろ？休めるのかな？

藍子 してないわよ。

哲央 え？

藍子 気づいてないの？やめたわよあの子、隠してるけど。

哲央 いつ？

藍子 ニヶ月前くらい。気づかなかった？

哲央 知らないよ。だって朝出てくたろう。

藍子 パチンコ。

哲央 は？

藍子 駅前の。見かけたの。

哲央 あいつが？え、今日も？

藍子 だから23時まで連絡つかなかったんじゃない。

哲央 閉店まで打つのか！？

藍子 残業熱心よね。

哲央 なんだそれ…。

藍子 どうなんのかね、あの子の人生。

哲央 まったく…。

藍子 これで家までなくなったら。

哲央 そりやまだわかんないよ。

藍子 …寒い。この団地って相変わらず寒いわね。すきま風がひどいのよ。

哲央 言うなよそういうこと。

藍子 ん？(おもむろにコタツをめくって覗き)ああっ、

哲央 え、え？

藍子 切れてるこれ、コタツ。

哲央 ああ、

藍子 壊れてるの？どうりで寒いと思った。

哲央 (コードを拾い)はずれた。

哲央はコードをはめにいく。改めて部屋を見回す藍子。取り込んだばかりの洗濯物からブラジャーがはみ出ている様子を眺める。

藍子 なんていうか…みっちゃん変わったね。

哲央 …。

藍子 そう思わない？



藍子はコタツから出て立ち上がる。遠くから消防車のサイレンが近づいてくる。

哲央 (コタツ) ついたよ。

藍子 お手洗い。お腹冷えちゃった。

テラス窓に近づく藍子。消防車はサイレンを鳴らして団地のそばを通りすぎていく。

哲央 …見えるだろ。

藍子 野焼きでも見てるみたいね。

哲央 お前、結構余裕あるな。

藍子 現実味がないだけよ。

哲央 …どうするかなあ。

藍子 ヤマダ電機だっけ。

哲央 え？

藍子 ウエストランドがあったとこ、昔。

哲央 うん、

藍子 ショッピングセンターなんか、建てなきゃ良かったのよ。

哲央 お前、文句言ってたろ？うちの町は電気屋しかないって。

藍子 …なんか懐かしいわね、この景色。

哲央 うん。

藍子 わかんないもんだね。取り壊すと思って引越したのにさ。なくなるはずのこっちが残って、あっちが燃えて。

哲央 言うなよ、

藍子 …。

哲央 まだわかんないだろ。

藍子 ほら、シャンプーの臭いがする。

哲央 え？

藍子 お隣からよ。ね？すきま風がひどいの。

藍子は話しながらトイレに向かっていった。トイレの扉が閉まる。哲央はシャワーの匂いを探すように辺りを嗅いでみる。

哲央 (キッチンの方へ向かって) ああ、確かに(匂い)するな。

返答がないので、哲央は線香の箱を取り、隣の部屋に向かうと慎重に中を覗く。やがて部屋に入ろうとしたとき、シャワーを流す音が聞こえる。

哲央 風呂使ってるの？

やはり返答がない。哲央は気にしつつも隣の部屋に入ってしまった。

再び消防車のサイレンが近づいてくる。消防車は警鐘を鳴らして騒がしい音を立て、団地の近くを通りすぎていく。

シャワーの音がやみ、しばらくして、部屋の中に濡れたケン一が入ってくる。風呂上がりのようで、髪は濡れたまま、腰にタオルを巻き、トレーナーを羽織りつつ部屋に入ると、下着を探してウロウロする。

隣室で、哲央がリン棒をチーンと鳴らす音が聞こえ、ケン一は隣室を覗いた。

ケン一に気づいたのか、部屋の奥で小さく哲央の悲鳴。緩く会釈するケン一。

\* 哲央 (奥から) え？

ケン一は下着を諦め、片手に持っていたスウェットパンツをはき、煙草を取る。とベランダに出て行く。

哲央は這うようにして隣室から出てきて、ケン一を伺う。ケン一は火災現場の方を見ながら煙草を吸っている。奥でトイレの流水音。

\* 藍子 (奥から) みっちゃん？

ケン一を遠巻きに見ながら哲央が部屋を出ようとする、怪訝な様子で藍子が戻ってくる。

藍子　ねえみっちゃん戻ってる？お風呂が…、

哲央　（困惑したままベランダを指さす）

藍子　…（声を潜め）誰？

哲央　（首を振る）

藍子　いつからいた？

哲央　（首を振る）

藍子　え？

哲央　知らない、

ケン一　（振り向く）

藍子　あ…、（会釈）

ケン一　（会釈し、また外を見る）

藍子　（哲央を促す）

哲央　あの…、

鉄扉が開く音。

藍子　みっちゃん？（玄関に行こうとする）

\* 広満　（奥から）はいここですよー。

玄関に行きかけますが、また見知らぬ声に立ち止まる藍子と哲央。

\* 広満　みっちゃん。みっちゃんお客さんだよ。いいよ、上がって。

\* 有季　いいんですか。

奥から哲央と藍子の娘、有季（ゆき）の声。

\* 広満 うん入っちゃっていいよ。

\* 有季 あの、うちの親が、

藍子 有季？

\* 有季 お母さん？

\* 広満 ほらいたでしょう、

藍子が出ようとすると、それより先に買い物袋を下げた広満が入ってくる。当惑して立ち止まる藍子。

広満 ああすいません、

藍子 あ、

広満 ああどうも。大変でしたね今夜は。(哲央に)こんばんは。

哲央 あ…、

広満 みっちゃんは？

哲央 買い物に…、

広満 お茶切れてたんでしよう？(茶筒を振って)やっぱりだ。

混乱して呆然とする哲央と藍子。広満は構わず部屋に入ると、コタツに買い物袋を置き、手慣れた様子で上着を脱いだりしている。有季が顔を覗かせる。

藍子 有季、

有季 もー何で電話でないの？

藍子 (手招き、有季を掴む)

有季 何度かけてもどっちもでないだもん…何？

広満 下の、ポストの前でね、お嬢さんウロウロしてるから、声かけたら部屋がわかんないって。

有季 すいませんでした。

広満 いやいや、老朽化しちやってねここも。部屋番号がこすれて見えなくなっちゃってるから。よく宅急便なんかも文句言ってますよ。

哲央 あのすいません、

広満 はい。

哲央 いや…どちら…、

広満 ああ、上の階の者です。

哲央 ああ、

藍子 (同時に) ああ、

勝手に戸棚を開け、新しい煎茶のパックを出す広満。

広満 ここに仕舞っておくって言ったのにな、この前。

哲央 あの…、

広満 すぐ入れますから、すいませんね。

哲央 いや、あの、そちらも？

広満 どちら。

哲央 あちら。

広満 え？(ベランダを覗き) ああ。せがれです。

哲央 ああ、

藍子 ああ、

広満 のようなものというか。

藍子 え？

広満 さては何も話してないなみっちゃん。ねえ？

藍子 ええ、

広満 その様子だと。

哲央 実はそうなんです。ここ一緒に住んでらっしゃる？

広満 だから上の階です。

哲央 あ。

広満 仲良くさせてもらってて。

哲央 ええ、

広満 うちの部屋のね、風呂がずっと壊れてて。

藍子 (納得) ああ、

広満 入らせてもらってるんですよ。

哲央 (納得) ああ。

広満 …それ以上、特に説明はないんですが。

哲央 ああいやいや、わかりました。

藍子 路子さんの、パートナーでいらっしやるとか？

広満 私が？

藍子 ええ…、

広満 上の階の者です。

藍子 (それ以上聞けず、頷く)…。

有季 どうかしたの？

藍子 ううん、

哲央 あ、窪居と言います。

広満 石川広満です。

哲央 妻と、娘の有季です。

藍子 (頭を下げ) お邪魔してすみません。

広満 いえ、私の家じゃないですから。

藍子 あ。

広満 (コタツに) 入って入って、寒いから。災難でしたねほんとに。

我が家同然の振る舞いで茶を煎れる広満に戸惑いつつも、コタツに集まる一  
同。

有季 それ脱いだら？

藍子 ああ、(慌てて脱ぐ)

広満 (頭巾を見て) 防空頭巾だ。ウン。

藍子 脱ぐの忘れてました。

広満 戦時中を思い出しますね。

藍子 ああ、

広満 まあ私戦後の生まれですけど。

藍子 ……

ケン一が煙草を吸い終え、部屋に戻ってくる。

広満 お前これ。

有季 (ケン一を見て驚き)え？

広満がケン一に買い物袋を渡すと、ケン一は袋の中からネギなどの食材を取り出しながら、台所へ消えていく。ケン一を凝視する有季。

広満 ご近所はみんな、避難したんですか。

哲央 ええたぶん。うちの周り空き家が多いんで、そんなに大勢じゃないと思うんですが。

広満 延焼は進んでいます？

哲央 (有季に)どうだった？…有季、

有季 え、

哲央 うち。見えたんだろジヨナサンから。

有季 ああ、

藍子 よくわかんなかったのよね。

有季 まだ燃えてなかったと思う。

広満 ジヨナサン。じゃあお宅は、ウエストランドの裏っかわのへん？

哲央 はい。

広満 なら大丈夫ですよ。

藍子 そうですね。

広満 今風向きがこっちだから、奥には流れないでしょう。

哲央 そうですか、

藍子 良かった。

広満 あの辺りもすっかり人が減りましたよね。

藍子 そうですね。

広満 それにくわえてこれじゃあ。

藍子 ええ。

広満 思えばあのシヨップ・ピングセンターは最初から不運というか悲運というか、カタストロフなスタートでしたよね。「西町ニュータウンに巨大シヨップ・ピングモール誕生！」なんて華々しく開店したはいいけど、何年もしないうちにあれですよ、あれ。

哲央 (頷き)：：土壤汚染。

広満 住民は減るわ、客足は遠のくわ：：そもそも名前が良くないと  
思ってたんです。「ウエストランド」なんて。

哲央 名前ですか。

広満 伸ばしていったら「ウエーストランド」、”荒れ地”って意味です  
からね。(笑って)我々みんな、荒れ地の住人ってわけですよ。そ  
こに火事なんてあったらもう：：、

藍子・哲央 (落ち込んで)：：。

広満 お宅は大丈夫ですから。風向きからして。

ケン一 ケン一が漬け物を載せた皿を持ってきて、コタツのテーブルに乗せる。

ケン一 (奥から)乱れとつたよ、風。

広満 ん？風向き？

ケン一 うん。

広満 ああそう：：。

哲央・藍子 ……。

有季 やだどうしよう、

藍子 大丈夫よ有季、ちゃんと消火作業が進めば、

有季 ケンちゃん？



藍子 え？

有季 え……え、ケンちゃんですよね？

ケン一 え。

有季 違います？

広満 ご存じですか、ケン一のこと。

有季 嘘、ええー！何でここにいるんですか？

藍子 知り合いなの？

有季 バイト先の先輩。

哲央 お前、今バイトしてるのか？

有季 は？違うよ、昔のバイト先。

哲央 ああ、

藍子 (哲央を肘でつつく)

有季 ここ住んでるんですか？え、いつ帰ってきたんですか？

ケン一 帰ってきた？

有季 あ、違いました？海外に行ったって聞いたから……、

広満 ……ああ。

ケン一 ……。

有季 あれ……え、覚えてないですか？私のこと。

ケン一 ……誰やっけ。

有季 有季だよ。イベントのバイトで一緒に着ぐるみやってた。窪居有季。

ケン一 ……？

有季 犬のドッキーくん、やってたでしょ？

ケン一 ああ！（有季を指して）猫のミーヤン？

有季 私はコアラ……。

ケン一 ……わからん。

有季 ……。

ケン一 は台所へ戻っていく。気まずい沈黙。

広満 鍋でもどうです？

哲央 え、鍋？

広満 腹減ってませんか。

哲央 いや特に…、

広満 今やってますから。

哲央 え、悪いですよ。

どうかお気遣いなく。

広満 お嬢ちゃんは、こんな時間だとダイエットの敵かな？

有季 ……(むっつりと)別に。

哲央 (ごまかして笑い)そんなお前、ナントカエリカ様みたいな、

有季 えー信じらんない…。

藍子 ……いつのバイトで会ったの？短大の時？

有季 高校…。

哲央 じゃ、だいぶ昔じゃないか。

藍子 パン屋さんじゃなかった？

有季 その前。

前。

有季 高2の夏休み。

藍子 ああ一ヶ月したね、そっいえば。

哲央 (大げさに)そりゃ一ヶ月じゃ忘れたって無理ないよ。なあ？

藍子 うん。

有季 初めてのバイト…。

哲央 (笑い)憶えてない憶えてない。

有季 初めてした人。

哲央 ……は？

広満 ……今、静かに爆弾が落とされましたな。

哲央 なにを。

藍子 もういいよ、

有季 え？普通そんなことあって忘れる？

藍子 (苦し紛れに) ……恥ずかしくって、そんなフリしてるだけかもよ、  
なかったぶり？恥ずかしいって、私と「した」ことが、

哲央 おい！そんな話やめろ。

有季 ……

哲央 他所様のお宅で。

有季 ……よく言う。

哲央 は？

有季 自分も知らんぷりしてる癖に。

哲央 なにを？

有季 ねえ、ホテル行く？お母さん。

藍子 今から？

有季 ここ移動して。

藍子 なんで。

有季 お母さんだってわかってるんでしょほんとは。

藍子 え……？

哲央 パチンコのことか？

有季 は？

哲央 俺は知らなかったよ、仕事辞めたのなんか、  
また爆弾が。

広満 また、

藍子 あなた、

哲央 さつきお母さんに聞いたんだから。

有季 そんな話してないけど、

哲央 何で言わなかったの。

有季 はあ？

哲央 何ヶ月も内緒にして。

藍子 ねえ、それこそ今話すことじゃ、

有季 言っでどうすんの？

哲央 止めたよ、

有季 なにを、

哲央 仕事辞めるのをだよ。

有季 辞めたわけじゃないもん、

哲央 じゃなんで会社行ってないんだ。

有季 だから……もういいよ。

哲央 ……え？あ、クビになったのお前？

有季 ちよっ……、

皿やカセットコンロを運んできたケン一が話を聞いている。陰悪な空気。

有季 ……何でそういう話するの……。

哲央 お前が先に……。

広満 (防災頭巾を取り、おどけてかぶるマネをし) 避難しようかな。

ケン一 ん？

広満 次々と爆弾が……。 (誰もウケないので黙る)

玄関が開く音。路子が帰ってくる。

\* 路子 待たせてごめんねー。

藍子 お帰りなさい、

広満 みつちゃん、お茶あるよ。

\* 路子 先生いるの？

哲央 先生？

広満 私です。お茶仕舞ってあったよー。

藍子 (行こうとするケン一に) 手伝いましょうか。

ケン一 え、

藍子 お鍋。

ケン一と一緒に部屋を出ていく藍子。

\* 路子 あ。藍子ちゃんごめんなさい。

\* 藍子 ええ？

\* 路子 ケンちゃんに、この人にお風呂貸してること、私言い忘れて、

\* 藍子 聞いた聞いた。

\* 路子 驚いたでしょう、

\* 藍子 うん、かなり。

\* 路子 有季ちゃんも来た？

\* 藍子 うん、今さっき。

有季 お父さん、何で私来たと思う？

哲央 え？

有季 ジョナサン出て。お母さんに「この住所聞いたからだよ。

哲央 だからなに？

広満 (人数を数え)コタツじゃ小さいな。おい、座卓持ってきて。

\* 路子 何か作ってるの？

広満 鍋だよ。

路子 鍋？

路子が部屋に入ってきた。有季は立ち上がって挨拶する。

有季 こんにちは。

路子 有季ちゃん？

有季 はい。遅い時間にお邪魔してすみません。(丁寧に頭を下げる)

路子 わあ、立派なお嬢さんになって。

有季 ご無沙汰してます。

路子 え、私のこと憶えてる？

有季 はい、すごくよく憶えています。

路子 ほんと？

哲央 (広満に説明し)9歳までこの団地にいたんで。

広満　　ああそうですか。

藍子　　夫の実家があったものですから。

挨拶を聞き藍子も入ってきて、後ろに座卓を持ったケン一が続く。

哲央　　何度か遊んでもらったっけ。

路子　　たしか……

有季　　というか。父が浮気してたので。

路子　　え、

有季　　そうだよね？

藍子　　有季！

消防車のサイレンが近づいてくる。

藍子　　それ、お母さんの爆弾。

有季はコタツに戻る。言葉をなくす路子を、覚悟したように見据える藍子。状況が掴めなず、哲央を見るケン一。

哲央　　……してないですよおおー、

広満が、防災頭巾をかぶってみせた。

## 第二場 「鍋パ」

30分後。

鍋の支度が出来上がったコタツを広満とケン一が囲んでいる。

広満は老眼鏡をかけ、慣れない手つきでスマートフォンを操作し、ラジオを流している。

箸を片手にソワソワした様子で座っているケン一が、やがて待ちきれないとばかりに鍋の蓋に手をかけるが、すかさず広満が人差し指を立てそれを制した。

仕方なく蓋から手を離すケン一は隣室に目をやった。奥で、哲央、藍子、路子、有季の話し声が聞こえてくる。

広満 ……これでいいのかな？

広満が指先でラジオを操作し、チャンネルをザッピングする。音楽番組、トーク番組、ラジオのCM…その操作の切れ目ごとに、隣室の音が漏れ聞こえる。

哲央 そうじゃなくなつてさ…、

ラジオ、JPOPの音楽番組に切り替わる。しばらく聞いて、チャンネルを変える広満。

有季 だって見たんだもん…、

藍子 聞いて聞いて…、

局が代わり、ラジオのCM切り替わる。CMへ。チャンネルを変える広満。

有季 お父さんは黙って、

哲央 何で俺の話を、

路子 私に説明させて、

ラジオ、切り替わる。ラジオドラマへ。連続してチャンネルを変える広満。隣室の会話が聞こえず、ケン一は身体を伸ばして隣室を伺う。

いくつかのザッピングの後、ニュースが流れる。操作の手を止める広満。

ニュース 「：市西町のショッピングセンター「ウエストランド」で起きた火

災は」

広満 お、お。

ニュース 「出火から三時間が経過しましたが、今も鎮火には至らず、

現在も消火活動を行っています。出火当時、閉店直後の

ショッピングセンターには数十名の従業員が残っていました。現在のところ怪我人はまだ報告されておらず、消防は逃げ遅れた人がいないかどうか確認を行っています。近隣の住宅には市が用意した避難所等に移動し」

哲央 だからそうだったろ！

ニュース 「・・・現在も不安な一夜を過ごしています。」

哲央が戻ってきて、隣室を見ていた広満は視線をスマートフォンへ落とした。ケン一は待つてましたとばかりに鍋の蓋に手を伸ばすが、広満が制止し、哲央の様子を窺う。

気まずそうにコタツの前に座る哲央。ケン一はにこやかに蓋を開けてみせるが、哲央の渋い表情に仕方なく蓋を閉じる。すると有季が出てきて、隣室の戸口の前に立った。

有季 わかったって。

哲央 ……

有季 そんな怒らないでよ。(哲央が立ち上がったので)お父さん、

哲央は儼然としてベランダの外へ出て行く。



有季 ……どうでした？ニュース。

広満 特に新しい情報は無いね。(携帯を有季に返す)ありがとう。

有季 操作わかりました？

広満 チョロいよ。さて、あちらは……。

ケン一は有季に鍋の蓋を開けてみせるが、有季にそっぽを向かれ、ガツカリしたように蓋を閉じる。と、隣室から藍子と路子の笑い声。

広満 お？

路子と藍子が和やかに談笑しながら部屋に戻ってきた。

路子 お鍋できた？

ケン一 うん。

藍子 みっちゃん思い出した。

路子 え？

藍子 あの人よね？口にヒゲ生えたおばさん。

路子 (笑って)そうそうそう。

広満 なんの話。

路子 昔近所に住んでたおばさん。

藍子 懐かしい。

広満 いつの間にだいぶ話題が変わったようだね。

有季 お母さん。(ベランダに視線を促す)

藍子 ……どういふんだろ、あれ。

有季 いじけちゃった。

藍子 あんたのせいよ。

哲央 (ベランダの窓を開け)いじけてないよ。

藍子 聞こえてる。

広満 解決したんですか？その、あれやこれやは。

藍子 あ……すみませんお騒がせして。

路子 ごめんね。

藍子 みっちゃんが謝らないで。

ケン一 じゃあ(鍋の蓋をあけようとする)、

有季 私が誤解してたんです。

広満 誤解。

有季 中学の時、お父さんがここに何度も来てるの見てて私。仲いい子が向かいの団地に住んでたんで、遊び行くと「あれ有季ちゃんのお父さんじゃない？」みたいなことが何度か。あれ？引つ越したのに何でいんの？みたいなの。

広満 ほう。

有季 そしたら一度、二人がこの団地から出てくるのが見えて、あーそういうことかって。路子さんは子ども頃会ったことあるけど、そういやお父さんと仲良かったとか、うちが引つ越したのはそれでかなとか、いろいろ結びついちゃって。

藍子 子どもってやですね、変なところ勘ぐるから。

広満 でも違つたと。

路子 保険の相談してたの、てっちゃんに。

広満 保険。

路子 父のね。三年前亡くなるまで寝たきりだったの前先生にも話したでしょ？入院繰り返してたんだけど、その頃、自宅療養に切り替えたときで。医療保険やなんか、てっちゃんには何度も相談に乗ってもらってたの。

藍子 主人、保険会社の人間なんで。

路子 うちに来てもらったのがいけなかったね。父が会いたがつちゃつて。

藍子 幼なじみなんですよ、みっちゃんと主人。

路子 有季ちゃんそんなこと知らないもんね。

有季 完全にデキてると思ってました。

広満 それでお嬢ちゃんはすつ飛んできたわけだ。父親が火事のどさくさに愛人の家に来てるぞと。

有季 そうそう、半分興味本位ですけど。

広満　なんだ。爆弾なんて言うからもっと修羅場になるかと思いき  
たよ。

藍子　ああ……。

有季　ごめんなさい路子さん。

路子　いいのよ。

ケン一　じゃあ鍋、(鍋を開けようとするが)

哲央　(ペランダを開け)俺には謝らないのか？

有季　聞こえてるなら入れば？

哲央　俺だって何度も説明したろう、誤解だって。

有季　男の話は当てにならないの。

哲央　男ってお前、親に向かって、

有季　(ケン一を睨みつつ)忘れちゃう人もいるし、

哲央　それ別の話だろう、

藍子　誤解でもないじゃない？あなたの場合は。

哲央　……。

広満　あら？

藍子　あの人ね、好きだったんですよみっちゃんのこと。

哲央　おい、

藍子　学生時代から。でも一度も相手にされなかったんですって。

広満　ほう……。

哲央　別に……

藍子　片想いだったんです、みっちゃんにはいつも誰かいたから。

路子　藍子ちゃんてば。

有季　さつきそれ聞いて、全部合点がいったっていうか、

哲央　(窓を閉める)

有季　片想いなら納得……ってあーもうごめんってー。

広満　それが爆弾？

藍子　え？

広満　奥さんの。

藍子　……(笑って)いえ、あんなの冗談ですから。

路子　……。

有季 場を荒らしてすみません、お父さんごときが。

藍子 あんたが荒らしたんでしょ。

有季 お気を悪くさせちゃいましたか？

広満 私が？なぜ私？

有季 だって、

ケン一 (遮り)有季ちゃん、鍋つちゅうのは！

有季 え。

ケン一 ……鍋つちゅうのは、それぞれの食材に適した煮込み時間があつてね、必ずしも長く煮込めば良いわけじゃないんですね。肉なんかも煮すぎると味が抜けて。パサパサの出し殻になっちゃうし、水が吸われると締めのおじやも作れないしマロニーちゃん溶けちゃうしそろそろ食べた方が良いんじゃないかという気がするんですけど、どうかね有季ちゃん。

有季 ……はあ。

広満 ……腹が減ると、時々饒舌になるんです。

藍子 ああ。

路子 ごめん、食べよっか。

藍子 そうね。

ケン一、勢いよく鍋の蓋を開け、皿によそう。

一同も箸を出したり、皿を渡したり、支度をする。

藍子 わあおいしそう！

路子 よそつちやっていい？

有季 いきなり名前呼ばないでくれます？

ケン一 思い出した。

有季 え、

ケン一 (有季を見て)久し振りやね。

有季 ……(ちよっと嬉しい)なにそれ。

広満 さあ、いただきます。

ケン一 (もう食べている)

藍子 変な感じね、こんな夜中に。

路子 ほんと。

藍子 でも不思議とお腹すいてきた。

ケン一 食べる？

有季 ……うん。

ケン一 (皿によそって渡す)

広満 ま、ひとつ。(日本酒を注ぐ)とする)

藍子 あ、いえいえ、お酒は…。

広満 あつたまりますよ。

藍子 ……(酒を受け取り、ベランダに)あなたもいただかない？

哲央 ……。

有季 鍋。パだよ。

広満 鍋。パ？

有季 鍋。パーティー。

広満 鍋。パーティーですよー！

哲央 ……。

藍子 ほっときましょう。

路子 いいの？

有季 いただきまーす、

広満 食欲ないかな？

哲央 (窓を開け)いやあのですね、

藍子 (食べながら)何度も開けないで、寒いから。

哲央 せっかくですけど、そもそも鍋。パなんて心境じゃないんですよ。

わかってます？今、あそこで、何が起きてるか。

有季 (食べながら)火事。

哲央 そうだよー！こんな非常事態に鍋なんてつついて、明日が心配じゃないのか。

藍子 どうしようもないでしょう、一晩中祈ってればいいの？

哲央 ……。

藍子 何もできないんだし。観念するしかないわよ。

有季 来なよお父さん、おいしいよ。

路子 (具を摘まみ)これ何？

ケン一 魚肉ソーセージ。

広満 具は変わってますけど。どうぞ。

路子 食べようよてっちゃん。

哲央 ……。

路子 ほら、早く閉めて。

藍子 (酒を呑む)

有季 てっちゃん。(手招く)

哲央 うるさい。

部屋に入ってくる哲央。のそのそとコタツに向かう。

哲央 (藍子を咎め)呑んでるのか？

藍子 少しよ。

広満 てっちゃんもどうですか。(酒を勧める)

哲央 その呼び方(やめろ)…結構です。

路子 ビールもあつたよね。

ケン一、ビールを取りに行く。

哲央 ああ、いやいや。

藍子 お酒やめたから。

路子 ほんと？てっちゃんが？

哲央 いや…、

藍子 ほら、体のこと考えたら。

路子 どうかしたの？

藍子 え？だつて、

哲央 酒なんて気分じゃないですし。

藍子 ……。

哲央 明日も仕事なんで。

有季 休んだら？

哲央 お前が言うなよ。

有季 (ムカ) ……。

ビールとトマトジュースを持って戻ってくるケン一。

路子 私もらう。(ビールを受け取り)有季ちゃんは？

有季 あ、じゃトマトジュース。

藍子 ねえ、みっちゃん知らないの？

路子 ん？なんのこと？

藍子 (なにか言おうとする)

有季 えっ、なにをするの！

ケン一が有季の鍋用の取り皿にトマトジュースを注いでいる。

ケン一 なにつて？(自分の取り皿にもトマトジュースを注ぐ)

有季 ……トマト鍋？

ケン一 風(ふう)。(構わず食べる)

有季 やだー。

路子 知らないって、なに？

藍子 ううん。

広満 てっちゃんは、今も保険会社にお勤めで？

藍子 ええ、

広満 どのくらいの保険が出るんですかね。(窓の外を見て)あれは。

哲央 あれ？ああ…どうでしょう。まあ店舗ごとに損害の程度も

違うと思いますけど。

広満 相当なものでしょうなあ。以前オクラホマシティでトルネードに遭遇した時にね、

路子 トルネードって、竜巻？

広満 (頷き)宿の主人の家が巻き込まれて倒壊したんです。本人たちは地下シェルターに入って無事でしたけど。

藍子 あらあ、

広満 屋根や家具なんか何百メートルも吹き飛ばされてね。こりやおおごとだと思ったら、案外人たちはケロッとしてるんだな。聞けば、修繕費用なんかも全部、保険で帰ってくるんだそうですよ。

路子 全部？

広満 ええ。アメリカさんの保険であ、太っ腹なんですってね？

藍子 そうなの？

哲央 あつちはサービス競争が激しいし、出し渋ると集団訴訟なんかされかねないからな。

路子 じゃあ竜巻がある度に新築の家を建てられるのね？

広満 そう。次はどんな家にしようかなーって明るく言ってたよ。

有季 えーいいな。もううちもさ、

哲央 やめなさい。

広満 死んだら終わりだよお嬢ちゃん。危険と隣り合わせに暮らして、

新しい家をもろうわけだ。

有季 それでもいい。1からやり直せるなら。

哲央 言うのは簡単さ。

藍子 いつまでできるものかしら。

路子 ん？

藍子 なにもないところからやり直すなんて。

哲央 ……あなたも見たんですか？竜巻。

広満 ええ、ええ。私らがいた場所は幸い軌道から外れてたんでね、車で追っかけたよな。



有季 ケンちゃんも見たの？

ケン一 (頷く)

広満 だだっ広い平野の向こうから、鉛筆の先を逆さにしたような渦巻きがこちらへゆっくり近づいてくる。といっても時速100キロ以上で移動してくるわけですから、まっまっしてたらアツという間に飲み込まれちゃう。

路子 怖い。

広満 鉛筆の先が、だんだん太くなってきて、そうだなあ、

ケン一 (立ち上がり)天からチンコが生えてきたみたいだね。

藍子 チン、

有季 どういうこと？

ケン一 (表現して見せ)巨大なチンコのドリルが地面を削りながらドゥッと進んでくるのよ、ドルルルッ、ドルルルッ、土埃がスベルマのようなしぶきを上げて、

哲央 スベルマ？

路子 ちょっと、

ケン一 まるで空全部がケダモノのオスになったような気がしたよね……

哲央 おい君！娘の前で、そんな話は止めてくれよ。

広満 割と正確な描写でしたよ。

哲央 鍋してるからって、君がどういう奴なのか忘れてないからな。

ケン一 ……。(コタツに戻る)

有季 オクラホマってアメリカの？

広満 トルネードが有名なところだね。

有季 オズの魔法使いか。

広満 それはカンザスだね。

路子 初めて聞いたね、竜巻の話なんて。

広満 そうかい？

路子 先生とケンちゃん、いろんな国を旅してるのよ。

藍子 へえ。

広満 旅といつかね、教職をやめたときに一年ほど放浪したんです。

藍子 教職というと、

広満 高校です。

藍子 ああ、それで先生。

広満 アメリカ大陸からヨーロッパ、アジア…、

藍子 いいですね親子で。

路子 え？

有季 それって12年前ですか？

広満 ん？ああもうそのくらいになるかな。

有季 2005年の夏。

哲央 やけに具体的な…：あ。

有季 だからお金盗ったの？

哲央 え？

有季 だから消えたんだケンちゃん！美香子が言ってたもん、恋人と

駆け落ちしてアメリカ飛んだって、

ケン一 美香子？

有季 カバの婦人警官！

ケン一 ん？？

有季 ヒポ・ポリス！

ケン一 んん？？

有季 だから同じバイト先の、カバが警察帽かぶった着ぐるみ…：それ

はどうでもいいけど、え？親子旅行のためだったの？

哲央 金取ったってなんだ？

有季 …：バイト先のお金。

哲央 はあ？

有季 事務所から盗んで、突然いなくなったの…。

哲央 あんたそうなのか？

ケン一 …：（思い出せず）カバの婦人警官…：？

哲央 そこ引つかからなくていいよ！（広満に）お宅知ってました？

広満 うーんと、

哲央 知ってたんですね？

広満 まあ、若気の至りでしょう。

哲央 あなた若くないでしょう！旅行するのに泥棒って、息子にどう  
いう教育してんですか。

路子 ねえ待って、息子じゃないから。

哲央 え？だって、

路子 ケンちゃん、先生の教え子よ。

藍子 高校の？

路子 うん。

哲央 ……

広満 せがれの、ようなものって言ったでしょ。

有季 確かにケンちゃん方言だもんね。どこだったけ？

哲央 教育者が泥棒させるなんてもっと問題じゃないですか？

広満 は、仰るとおりで。

哲央 (路子に)君は知ってたの？

路子 ん？

哲央 こういう人たちだって。仮にも聖職……

ケン一 先生は関係ねえし。俺が好きでついてったんやもん。

哲央 (気圧され)……な、なんか開き直ってるけどさ……。

藍子 フフツ、

路子 え？

藍子 あ、ごめん。なんか可笑しくって。

哲央 なんで？

藍子 なんでだろ、酔っ払ってきたのかも。あそうだ有季、その鞆  
とって。

有季 これ？

藍子 うん。

有季 (取って渡し)重、

藍子 金庫が入ってるから。とっさに大事な物入れてきたからね。  
お財布に通帳に、

広満 いや、今はこいつ、してませんよ？

藍子 え？

広満 盗みなんて。そこに金庫があることも知ら(ない)、

藍子 ああ、いえいえ、お薬出すだけです。

路子 薬？

藍子 うん、飲み忘れてたから……。 (薬箱を出す)

有季 なーんだ。女じゃなかったんだ。

藍子 ん？

有季 私てつきりミーヤンと逃げたと思ってた。

ケン一 猫の？

有季 ケンちゃんと同じ時期に辞めたバイトの……。どうせ憶えて  
ないか。(機嫌良く皿を差し出し)トマトください！

ケン一 気に入った？(皿を受け取り、トマトジュースを足す)

路子 どこか悪いの？藍子ちゃん。

藍子 ううん私は。

ケン一 (皿を差し出す)

藍子 はいあなた、(哲央に薬を渡そうとする)

ケン一 おっと、

ケン一の腕と藍子の手がぶつかりそうになり、ケン一がよけた弾みに皿の  
中身が近くにいた路子の服にこぼれた。

有季 ああ、

広満 ああ、

藍子 ごめんみつちゃん！

路子 大丈夫大丈夫、

藍子 熱かった？

路子 平気。

藍子 何か拭く物……(部屋を探す)

広満 (近くに落ちていた布を渡す)

藍子 ごめんね、

藍子が路子の服を拭こうとすると、ケン一が既に手元の手ぬぐいで拭いている。わしわしと遠慮無く路子の胸元を拭くケン一に思わず手を止める藍子。

ケン一 やけどした？

路子 ううん。ぬるかった。

ケン一 (路子のシャツを引っ張り、胸元から服の下を覗く)

哲央&有季 あっ……

ケン一 脱いだら？

路子 いいよ別に。

広満 脱いだ方が良い。落ちないよ。

路子 そお？

藍子 う、うん、そうよ。

ケン一 (脱がそうとする)

哲央 ちよ、

路子 いやだ、向こうで脱ぐよ。(隣の部屋へ向かう)

藍子 ほんとごめん、

路子 気にしないで藍子ちゃん。

ケン一 替えあった？

路子 全部洗ってるかも。

隣室へ入っていく路子の後ろを、ケン一がついていく。驚く哲央、有季、藍子。

有季 え……？

広満 あれですよ。

哲央 はい？

広満 トマトはシミになりますからな。アットマトいう間に。

哲央 ……

広満 (ゆっくりハッキリ)「アッ、トマトいう間に」。

哲央 ……ああ、ははは、

全然面白くないが愛想笑いをする哲央、有季、藍子たち。満足げに笑う広満。

藍子 (口元を布で押さえ)オホホ……

有季 何持ってるのお母さん！

藍子 え？(布を拵げたらボクサーパンツ)あやダっ！

とっさに投げたパンツが、鍋に乗った皿たちの上に乗る。沈黙。

空気を読んで広満が箸の先でパンツを拾うが、鍋の汁がパンツについている。

「シャツ姿でケンーが戻ってくる。手には路子が脱いだ服を持ち、そのままキッチンの方へ向かう。」

広満 (ケンーにパンツを渡し)これも洗って。

ケンー うん。(なぜパンツ)ん……？

キッチンへ去るケンー。路子がケンーの着ていたスウェットを羽織って戻ってくる。

藍子 あら、

路子 着る服なかった。

哲央 いやおかしいでしょさすがに！

路子 え？

広満 どうしました。

哲央 あなたがた、上の階の人でしょ？

広満 上の階です？

哲央 なんか……距離感、おかしくないですか？

路子 距離感？

哲央 いやなんか、その……着替え手伝ったり、こう……(胸を)拭いたり、

広満 ええ？

哲央 その辺にパンツが落ちてたり……やっぱり住んでますよね？一緒に。

広満 だから上の、

哲央 それはわかりましたけど、実質、

広満 住んでませんよ。

哲央 だって勝手に洗濯したり、鍋作ったり、お茶の在処も知ってるし、

広満 まあ風呂借りたりはしますし、うち洗濯機も壊れてますから。

哲央 ああ。

広満 後は、時々食事したり……寝させてもらうくらいかなあ？

哲央 住んでるでしょそれ！

路子 そうなるのかなあ？

藍子 同棲してるの？

路子 え？

藍子 そう聞きたいみたい、夫は。

哲央 いや、

路子 違うわよ。

ケン一が戻ってくる。

広満 こいつがね、

有季 え？まさかケンちゃんと路子さん！？

路子 ないないない。

広満 いやケン一がね、絵をやってるものですから。

哲央 え？

広満 ダジャレですか。

哲央 ……なんですか？絵って。

広満 絵を描いてね、売ってるんですよ。ほら、駅前道ばたなんかで売ってる怪しい奴です。

ケン一 怪しいって言わんでよ、

広満 上の階はほとんどこいつのアトリエ状態で。画材で足の踏み場もないしね、油絵の具の匂いで寝られたもんじゃないんです。

哲央 だからって、

藍子 (遮り)だからってみっちゃんちに？

哲央 ……

広満 ええ、まあ、いつの間にか。

藍子 ですって。はいあなた、お菓飲んで。

哲央 あ？…いいよ今は。

藍子 ダメよ、バタバタしてて飲み忘れるとこだったじゃない。

哲央 後でいいよ。

路子 お菓って…、

藍子 でもそうねえ、他人同士の三人が同居なんて、ちょっと変わってるわね？

有季 珍しくないよ、シェアハウスとか流行ってるし。

藍子 シェアハウスか。でもみっちゃん、前に付き合ってた人は？

路子 いつ？

藍子 婚約した人いたじゃない。

路子 ああ、もうずいぶん前よ。

藍子 別れた？

路子 うん。



藍子 ええ、いつ？

路子 えっと……

哲央 おい、

藍子 あなたは早く薬。(路子に)いつ別れちゃったの？

哲央 なんでそんな、

藍子 飲んでよ、あなたが知りたいこと全部聞いてあげてるじゃない。

哲央 は？おかしいなということだよ。

藍子 おかしい？

哲央 酔ってるのか？

藍子 (怒りを抑え、笑顔で)おかしいのは、さっきからみっちゃんのことに関係ないのに怒ってるあなたでしょう！

哲央 ……

藍子 みっちゃんといると、学生時代に戻っちゃうのね。

有季 こじらせてんなー、片想い。

哲央 そんなんじゃないよ、

藍子 苛々してると心臓に悪いわよ？(薬を渡す)

哲央 ……

広満 病気でもされたんですか？

藍子 ええ、ちよつと。

有季 心臓の手術したんです。

路子 えっ、てっちゃん？

有季 はい、バイパス？の。

路子 大変じゃない。

広満 うん大ごとだね。

哲央 ……いや、何年も前のことですから。今は全然。

藍子 ええ、ちゃんと薬飲めば。

哲央 ……

有季 でも結構大変だったんですよ。

路子 そうでしょう、

有季 何度も緊急入院したし、難しい手術だからってお父さんなんかほとんど諦めモードで。だけとお母さんがすごかったの、

広満 ほう、

藍子 いいわよその話は。

有季 そう？私好きよこの話。絶対成功するからって、手術に挑戦するよう毎日毎日お父さんのこと説得して、なだめたりすかしたり、離婚届持ってって脅かしたりして、である日ついにお父さんも死ぬ気になって。

広満 死ぬ気。

有季 あ、比喻ですけど、まあ死ぬ気で生きる気になって。そしたらオペは成功して、お医者さんもビックリするくらい良くなったの。

路子 ああ良かった。

有季 これを私は、母が起こした窪居家の奇跡と呼んでます。

藍子 違うの！全然、そんなじゃないの。

有季 謙遜しております。

藍子 ほんとに違うの…。

広満 おかげで今があるんだから、感謝しないとすな。

藍子 …。

哲央 ……してますよ。

広満 じゃあちゃんと薬飲まないよ。

路子 そうよ。

哲央 ……すいません。

藍子 お鍋煮つまりそう、

路子 食べよう、

藍子 うん。あ……パンツが落ちてないところね。

路子 え？

再び食べ始めるケン一と路子。他の人たちは何となく箸をもてあそぶ。

有季 (携帯を出して)ねえ、美香子避難所だって。

藍子 ええ？

ケン一 (ハッとして)美香子……？

有季 だからカバの婦人警官。聞いたそばから忘れてる。

ケン一 ああ……、

藍子 みかちゃんちも避難したの？

有季 そうみたい。

藍子 いつ避難したの？今？

有季 わかんない、一時間前のline。

藍子 みかちゃんち、結構離れてるのにね。

有季 あ、そうだケンちゃん。

有季はケン一と一緒に携帯電話でセルフイーを撮る。

有季 美香子に送って良い？ケンちゃんのこと絶対憶えてるから。

(とケータイをいじる)

藍子 いつとき忘れてたわね、火事のこと。

哲央 ん？うん……。

藍子 でも、忘れてる方が気が楽。

有季 うん。

路子 そうね。

広満 シェアハウスも悪くないでしょう。

藍子 シェアハウスね。そんなテレビあったわね？男女が集まって、

惚れたのはれたの。

有季 「テラスハウス」ね。

広満 あれ見てるよ。

有季 嘘、先生が？

広満 団地もある意味テラスハウスですよ。

路子 この歳でそんなオシャレに言うのもね。

藍子　　そうね。

路子　　寄り合いよ、寄り合い所。

藍子　　(笑って)でもじゃあお二人は？

広満　　はい？

藍子　　どうして一緒に住むことになったんですか？

広満　　ああ、それは……、

藍子　　師弟関係？絵の師匠？

ケン一　　(鍋を食べながら)好きだからです、

藍子　　ああ。

ケン一　　ホモだからですよ。

哲央　　え？

広満　　……ホモだからですよ。

有季　　(吹き出して爆笑し)ちよーウケる！

広満　　……。

ケン一　　……。

有季　　え？……え、だって、え？

有季のケータイがバイブする。混乱しつつも着信先を確認し、電話に出る有季。

有季　　……美香子？うん……そう、ケンちゃん……え待って……え？

有季、ケン一たちを振り返りながら隣の部屋へ行く。

広満　　これテラスハウスなら、次回予告のタイミングですな。

藍子　　……あ、じゃあアメリカに駆け落ちてほんとに……。

広満　　そうなりますな。

藍子　　みっちゃん知ってたの？

路子　　うん、一応。

藍子 ……なあんだ、早く言ってよ。(哲央に笑いかけ)ねえ？

哲央 じゃ…じゃあ何でうちの娘と、

有季 お母さん…、

藍子是有季が戻って来るのに気づいて哲央を制した。有季は呆然として戻ってくる。

藍子 なんだって？美香子ちゃん。

ケン一 カバの婦人警官？

哲央 (遮り)いい加減にしろ！

藍子 有季？

有季 ……燃えてるって。

藍子 (聞き取れず)え？

有季 燃えちゃったって、美香子んち…。

窓の外を見る一同。心なしか窓の外から差し込む夜の明かりが、赤く染ま  
って見える。

### 第三場 「氷点」

一時間後。部屋の明かりは消え、キッチンと隣室から明かりが漏れてくる。鍋は片付き、コタツも筆筒に立てかけるようにして隅に寄せられ、部屋の端に布団が敷き直されている。その布団で広満が壁の方を向くようにして横たわっている。

部屋の奥から路子がもう布団をひと組抱えてやって来る。

路子　先生：先生、

返答がない。路子は広満の横に布団を敷く。敷き終わって枕を置く段になったとき、ふと枕を抱いて、匂いを嗅ぐ。

一回、二回。ゆっくり匂いを吸い込むと、不意にハツとして隣室を振り返った。恐れるように、乞うように、そっと隣室を覗く。

広満　…(背を向けたまま)お父さんかい。

路子　…うん。

広満　久々だね。

路子　…。

広満　話しておいで。

トイレを流す音が聞こえ、やがてケン一が入ってくる。ケン一は広満がいる反対側の部屋の隅に行き、置いてあったコタツ布団にくるまって座る。

路子　今夜、あつちで寝てね。てっちゃんたち、多分あつちは嫌だろうから。

ケン一　(頷く)

路子　先生も。

広満　…。

路子　お布団敷いてあるから。

広満 後で行くよ。

路子 うん。

路子は隣の部屋へ行った。ケン一はテレビ台の上のテーブルランプをつけ、置いてあった文庫本を開く。静かに玄関の鉄扉が開く音がして、しばらくすると有季が入ってくる。

ケン一、有季を一瞥するが、また本に戻る。有季は広満を踏まないよう気をつけつつ、ケン一に近づいた。

有季 煙草一本、もらえる？

ケン一はポケットから煙草を取り出し、箱ごと渡す。有季はベランダに出て行こうとテラス窓を開ける。が、ケン一を振り返って。

有季 見に行かなかった。家。

ケン一 ……。

有季 結局ね、途中まで行って引き返して来ちゃった。

ケン一 ……。

有季、ベランダに出るが戻ってきて。

有季 燃えちゃったか知るのが怖かったんじゃないの。お母さんが途中で気持ち悪くなっちゃって…お酒のせい。

ケン一 (頷く)……。

有季 下で休んでただけど、トイレ行ってお父さんに任せてきちゃった。

有季、ベランダに出て行き、煙草をくわえて火をつけようとする。が、また戻ってきて。

有季 私、会社の上司にセクハラされたの。

ケン一 (頷く)……。)

有季 っていう嘘ついて、会社辞めたの……正確に言うと、突然クビにされたから、腹いせに嘘ついちゃった……多分上司飛ばされると思う。(笑う)

ケン一 ……。

有季 (笑ってるが、泣きたくなり)……これからどうしたらいいの？  
仕事ないのに、家までなくなったら、あたし……。

反応しないケン一。有季はまたベランダに出て行くこうとする。

ケン一 (歌って)あなたならどうするー。

有季 ……え？

ケン一 泣くの歩くの死んじゃうのー、

有季 ……(合わせてメロディをつけ)かちよーをーはめて秋田に飛ばしたよー、

ケン一 (笑う)……。

有季 (笑い)……何読んでるの。

有季は部屋に入り、ケン一のそばに座ると、本を奪って眺める。

有季 (仏像が移った表紙を見て)宗教本？

ケン一 旅の本。

本の一節を読み上げる有季。(引用…藤原新也「全東洋街道」)

有季 “アイ、アイ、イタイ……ココ……ココ……アイ。女は私の手の甲の上  
に手を重ねた。それを強く揉むようにして下腹部に押しつけた。掌に体温が伝わり、指先に陰毛が……これエッチなやつ？



ケン一 違うよ。

有季 えーでも、

路子 戻ってたの？

路子が部屋に戻ってくる。

有季 ああ、

路子 どうだった？おうち。

有季 わかんないです。

路子 (頷き)：：藍子ちゃんたちは？

有季 まだ下の、水道がある花壇のあたりに。多分吐いてます。

路子 えっ、

有季 酔っちゃって。上に上げようとしたんですけど、座り込んだから。

路子 あらあ、

有季 父が連れてきますきつと。

路子 でも四階よここ。一人じゃ運べないでしょ、

有季 そうですね。

路子 迎えに行こうか、

有季 はい、じゃ、お願いします。(頭を下げて座る)

路子 え、う、うん。

広満 (むくりと起き上がり)酒弱かったか奥さん、

有季 あ、

路子 先生のせいよ。

路子は外へ出て行った。広満は隣室へ向かう。

広満 (行きかけるが)：：5分経っても戻らなかったら、お前らが行くんだよ。

有季 あ…、

広満 年寄りばっかなんだから。

有季 はい…。

広満 (歌い)あなたなーらどうするう、

広満は歌を口ずさみつつ、隣室に入ってしまった。

有季 ヤダ、起きてたんだ…、

ケン一 起こしたんよ。

有季 ヤキモ子焼いちやうかな？

ケン一 やかんよ。

有季はケン一の膝の間に入って座る。

有季 こんな近くにいても？

ケン一 うん。

有季 …拒まないよねケンちゃんて。だから勘違いしたのかな、私。

ケン一 …。

有季 (ケン一のスウェットパンツの前を引つ張って)チラッ、なーんちゃって、(中を覗くがとっさに目を覆い)あっ、あっあっ！

ケン一 ん？

有季 えっ、何でなにも履いてないの？！

ケン一 (自分もズボンの中を覗き)ああ、そうやった。

有季 モーヤダ、まともに見ちゃった。

ケン一 見たことあるんやろ？

有季 …何も感じなかったのね？

ケン一 ？

有季 あの時ケンちゃん。私にキスしても、触っても…あのおじいさんのこと想ってたの？

ケン一 ……おじいさん。

有季 おじいさんじゃん、だって何歳？あの人。ガンダルフだよ。

ケン一 ガンダルフ？

有季 ロード・オブ・ザ・リングの、2000歳くらい生きてるおじいさん。

ケン一 ……ははは、(笑う)

有季 知らない癖に。

ケン一 (笑う)あつ、(思い出し)「ロード・オブ・ザ・リング」の「ゴラム」の  
マネで)「愛しいしと…」、

有季 それゴラムでしょ。違うキャラだし。似てるって言ったらいぶ  
悪口。

ケン一 (笑う)

有季 意味わかんないよ、女子高生捨てておじいさんと駆け落ちとか。

ケン一 ……うん、

有季 ……捨てられる気持ち、知らないでしょ。

ケン一 ……。

有季 (本を返し)読んでいいよ本。エッチなところは音読して。

ケン一 ……(ページをめくり、読む) “旅の氷点”。

有季 (ヤジって)エッチじゃないぞ。

ケン一 (読む) “人の生きていく過程の中に、いくつかの節目があるか  
のように「旅」にも氷点がある。旅のはじめの、熱かった血潮は  
我知らず衰え、やがてそれが臨界点に達したとき、凍結する。  
そんな時、目の前に立ち現れる、何もかもに興味が薄れ、無  
関心になり、歩行は止まり、目は曇り、舌は喜ばず、耳はうっ  
とうしく、鼻は匂わない。そして気分は死期の前の老人のよ  
うに過去にばかり遡る”…、

有季 (遮って)キスしてもいい？

ケン一 え。

有季 は手を伸ばしてケン一の唇を指先で弄びながら体を起こす。ケン一は  
されるがままに有季を受け入れ、有季はゆっくり顔を近づける。

ケン一 ……口吸うとき、

有季 うん……、

ケン一 ガンダルフのこと想っていい？

有季 ……（構わずキスしようとする）……（が、やはり耐えきれず）あああ————も————！

布団に倒れ込み、突っ伏す有季。

ケン一 （笑う）

有季 ガンダルフめー！

ケン一 ……有季ちゃん俺はね。

有季 （布団に突っ伏したまま）ああ？

ケン一 氷点を探しに行ったつもりだったのよ、先生と。

有季 ……。

ケン一 世界中を旅したらさ。最初は愉しくたってそのうち限界が来るよね。俺にも先生にも、お互いの存在にも、何もかもが飽き飽きとしちゃうような氷点が来ると思ってたのよ。

そうしたら俺は突然先生の前から消えてやろうと思ってたの。そんでまた一からやり直すんだと思ってたの。

有季 一人で？

ケン一 （徐々に興奮して早口になり）そう一人で！不毛な関係はお終いにして。つまりさ、俺は駆け落ちしたんじゃないくて、先生を捨てる旅に出たのよ……でもね、旅して旅して、狙い通りに旅に飽きて、どこへ行ってもたいした景色じゃねえなと思って、何食つてもたいしてうまくねえなと思って、移動することさえめんどつちくって、嗚呼、ついに氷点に来たぞと思うのに、毎日思うことといたららよ、先生がいつか俺を捨てたらどうしよう、消えちゃったらどうしよう、死んじやったらどうしよう！

隣室で広満が話を聞いている。ケン一はますます昂ぶっている。

ケン一

笑っちゃうよね？捨てに行ったはずがしがみついたよ、氷点にしようが荒野にしようが竜巻見てようが、俺はただ一人の、目の前にいる、もうキスもしてくれん、抱いてもくれん、老いぼれがさ、いつ死んで俺を捨てちゃうのか怯えてるしかないのよ、だってさあ、

有季

ケンちゃん、

ケン一

俺には先生しかいないんだからさあ、

\* 広満

ケン一！

部屋の奥から広満が出てくる。

広満

……近所迷惑でしょっ！

ケン一

(荒い息)……。

広満

時々饒舌になるんです。

ケン一は有季の手を離れ、広満のそばに行くと、甘えるように抱きつく。

広満

時々甘えん坊になるんです。

ケン一

……チンコ勃つとるよ俺、先生。

広満

……。

ケン一

先生っ。

広満

うん……。

ケン一

(諦めたように笑って離れ)有季ちゃん……、

有季

ん、

ケン一

人はみんな捨てられるよ。どこにいても一緒よ。

有季

……。

ケン一

だから会社も家も、気にすんなよ。

ケン一は広満のどてらから鍵を出す。

広満 上で寝るのか？

ケン一 絵描いてくる。(広満の額にキスをし、ゴラムのマネで)……「愛し  
う」と」。

広満 なんだそりゃ。

ケン一 は行こうとするが、振り返る。

ケン一 (有季に)来る？

有季 ……うん、

ケン一 は近づいてきた有季の手を取った。二人は部屋を出ていく。

広満 は見送ると本を拾い上げ、老眼鏡をかけて本の中身に目を落とす。

広満 ……「誰にも氷点はある。必ずやって来る。」

\*有季 あ待って、

有季 が戻ってくる。広満は本を読む。有季はテレビ台に置き忘れたケン一の  
煙草を取りに行きながら、広満が本を読むのを聞く。

広満 “人間の心を溶かしてくれるものはニンゲンだ。ニンゲンの体温  
だ。とにかく付き合ってみたまえ。”

有季 ……。

有季 は部屋を出ていった。玄関が開く。路子、藍子、哲央が帰ってきたらし  
く、居合わせた有季たちと会話する声。

\*路子 ほら入って、

\*有季 大丈夫お母さん、

\*藍子 大丈夫大丈夫、

\*哲央 お前なんで戻ってこないんだよ、

\* 有季　ごめん、あーやっぱ吐いた？

\* 藍子　ちよっとね、

\* 哲央　ちよっとじゃないよもう、俺ドロドロだよ、

\* 路子　洗おうそれ。藍子ちゃんは休んで。うんそこじゃなくて奥で、

\* 哲央　座るなって、

\* 藍子　わかったらうるさいな、

\* 哲央　なんだその言い方。

\* 有季　ちゃんと寝なね。

\* 哲央　お前たちどこ行くの？

\* 有季　うんちよっと、

\* 哲央　ちよっとってなに、おい、

\* 藍子　おやすみいー、

鉄扉が閉まり、有季とケン一が出て行ったようだ。様子を窺っていた広満は隣室に戻り、ふすまを閉める。入れ違いに藍子がふらついた足取りで入ってきて布団に倒れ込む。奥から哲央と路子の声が聞こえる。

藍子　ふう……。

\* 路子　てっちゃん脱いで、それ洗うから。

\* 哲央　ああいいよ、流し貸して。

\* 路子　いいからいいから。ああ、結構ススかぶってるね。

\* 哲央　ほんとだ気づかなかった。たぶん家出るときに……アツ、（舌打ち）ゲロに触っちゃったよ……何で俺に引っかけけるかな。

藍子　（寝そべったまま笑い）フフ、

\* 路子　シャワー浴びたら？

\* 哲央　ええ、いいの？

\* 路子　うん、暖まるし。そのあいだに着替え用意しとくよ。

\* 哲央　そう？

藍子　ウフフフフ、

\* 哲央　ほんとごめんな。

\* 路子 何言ってるの。でもそろそろ寝なきゃね。明日も仕事でしょ？

\* 哲央 休めないかなほんと。

\* 路子 そうしなさいよ。

\* 哲央 (笑って)簡単に言うなよ。

藍子 (寝転んだまま、足をばたつかせて笑い)ウフフフフ、アハハハ、

\* 哲央 (藍子の声が聞こえ)・・・大丈夫かあいつ？

藍子 ……。

\* 路子 見とくから。早く入ってきて、タオルも置いとく。

\* 哲央 すまないね。

路子がコップとペットボトルの水を持って入ってきた。藍子、バツと起き上がり正座する。

隣室のふすまが閉まっていることを確認し、電気をつける路子。

路子 藍子ちゃん、平気？

藍子 はい。

路子 お水飲んで。

藍子 いえ、もういりません。

路子 ちょっとだけ、

藍子 いえ、ほんとにもう……。

頭を布団につけ、土下座する藍子。シャワーの音が聞こえてくる。

路子 ……藍子ちゃん、

藍子 ごめんね……みっともないとこ見せちゃって……。

路子 ううん。それ、着替えよっか。

藍子 ……ゲロ飛んでる？

路子 どうかな……でも結構ススがついてるみたいだから。

藍子 (バツと起きあがり)あ、お布団汚れちゃう、



路子 それはいいんだけど、（おもむろに藍子が脱ぎだし）あらあら、

藍子が服を脱ぎだしたので慌てて着替えを取りに行く路子。

藍子 何でお酒なんか飲んだんだろあたし。久し振りよこんなの。

路子 （近くにあった服を渡し）今日は大変だったから。

藍子 （着替えながら）ほんと、まだ信じられないわよ。

路子 ねえ。

藍子 こうしてみっちゃんちに来てるのも。

路子 ……ね。

藍子 あら？

藍子が自分の着た服を改めて見ると、ケン一のスウェットに着替えている。

路子 ……あ、ケンちゃんのしかなくて。

藍子 また？

お互いの格好を見て、思わず笑う二人。

藍子 どうしてえ？自分の服ないのみっちゃん。

路子 洗濯してて。

藍子 いっぱい持ってたじゃない、

路子 ほとんど捨てちゃった。

藍子 あらもったいない。ブランド物の服も？

路子 着てくところないし。

藍子 昔流行った、こんな肩パットの入った奴とか、

路子 そうそう、よく憶えてる。

藍子 似合ってたよあれ。でもどうしてなの？

路子 どうしてって言われてもなあ。

部屋を見回す藍子。路子は哲央のタオルと着替えを用意する。

藍子 私知ってるみっちゃんは、センスが良くてオシャレで、いつも誰かにもらった素敵な物身につけてて、この団地に住んでるのが不思議だった。

路子 それは、

藍子 お父さんがいらっしやっただけだからだってことはわかる。長い闘病生活だったもんね……でもいつときは、都心の方に住んでたでしょ？

路子 両親が離婚する前ね。まだ父も元気で、

藍子 あの肩パットの服はその頃のよね。

路子 よっぽど肩パットの服が気になってたのね？

藍子 あはは、

路子 (哲央に)着替え置いてくる。

路子は哲央の着替えとタオルを置きに行く。

藍子 だって憧れてたもん、私。みっちゃんのこと。

\* 路子 ええ？

藍子 独身で、垢抜けてて……聞く度に新しい恋人がいてさ。私なんかただ夫と娘を家から送り出すだけの平凡な毎日。だからみっちゃんと会うと、いつも女性週刊誌読んでもみたくない気分になったのよ。しかも巻頭ページの方ね、刺激的な見出しの。私なんかあれよ、「女性セブン」で言うところの、真ん中より後ろのほうにあるちっちゃいコーナー、「物忘れを防ぐ方法」とかそんなやつ。

路子 (戻ってきて)私からすれば藍子ちゃんの方が、立派なおうちも建てて、カワイイお子さんがいて、

藍子 (遮って乗り出し)不倫してたこともあったね？

路子 ……あったね。

藍子 みっちゃんからそういう話聞く度、(風呂の方を指し)あの人の

顔が引きつるもんだから、私可笑しいやら気の毒なやら。

路子 ねえ藍子ちゃん、

藍子 ほんとだもん。なのに、どうしてこれ？(両手を広げ、服を見せる)

路子 これ？

藍子 こんなかつこして、怪しい他人と暮らして、おまけにこの…

(部屋を見回して笑い)ずっと言いたかったけど、この部屋  
最悪よお！

路子 ……藍子ちゃん、

藍子 (突然反省し)ごめん、(隣室に)いらっしやるのよね。

路子 うん。

藍子 いつ知り合ったの？

路子 先生たち？いつのまにか……父が死んでから。

藍子 変な宗教の人とかじゃないよね？

路子 まさか。

藍子 (呆れて笑い)……知らない人と寝てるなんて。

路子 なんだか安心するの。二人に挟まれて寝ると、

藍子 挟まれて寝るの！？

路子 並んで寝るだけ。ただ…自分以外の寝息や匂いを感じると、  
落ち着くって言うのかな。

藍子 猫でも飼えば？

路子 (笑って)そっか。

藍子 お勤めはしてるんでしょう？前と同じ調剤薬局？

路子 今は大学病院。

藍子 ……何があっただらうって考えちゃって。何でみっちゃん  
変わったのって。

路子 誰だって変わるでしょ。

藍子 でも。

路子 時間が経てば……てっちゃんだって。

藍子 ……

路子 心臓のこと、知らなかった。教えてくれたら良かったのに。

藍子 そこがひとつの謎ですよね。

路子 薬関係なら私、少しは相談乗れると、

藍子 確かに人は変わる。けど、ずっと変わってくれないものもあつてさ。

路子 なんのこと？

藍子 ……とにかくみっちゃんなら、その気になればいつでもここから抜け出せたでしょ。

路子 抜け出す…。

藍子 だってこの団地…：ううん、この町自体、終わってるもん。さっきあの先生も言ったじゃない。荒れ地の住人ってやつ。うちも一緒よ、都市開発なんて話に乗って引越して、やっと一軒家建てた途端に地下水汚染だのなんだの。人が住めないわけじゃないけど、夢のニュータウン計画は頓挫して周りは空き家だらけ。オマケにこの火事！（笑い）…：どっからやり直しいんだろ。

路子 やり直したい？

藍子 ……

\* 哲央 （奥から）ねえ、これ着ちゃって良いの？

路子 うん。ねえ、藍子ちゃんもシャワー入れば？

藍子 いい。あでもそっか、家に帰れるとは限らないよね。避難所じゃお風呂ないだろうし…。

路子 ここにいてくれてもいいよ。

藍子 これ以上迷惑かけられない。

路子 なんて来たの？

藍子 え？

路子 藍子ちゃん質問ばかりするから。私も聞かせて。何で今日来たの？

藍子 だつてみっちゃんしか頼れる人、

路子 私のこと嫌ってたのに。

藍子 ……

\* 哲央      なあ、これあいつのじゃないか？

哲央が部屋に入ってくる。哲央もサイズのかなり大きなケナーのスウェット上下を着ている。哲央を見て、同時に吹き出して笑う、藍子と路子。

哲央      そんなに笑うなよ。

路子      だってねえ、

藍子      (笑いながら)こうしてみると、何ともみずばらしい中年ね！

哲央      なんだと？

路子      私たちみんなよ。

藍子      だって見てよ。(自分の格好を見せる)

哲央      ……ハハハ、(笑い出す)

三人      (笑う)

藍子      私髪ぼさぼさだし、

哲央      ほんとだ、

路子      私なんかちよつとニコゲロ飛んでるし。

藍子      アハハ! ……(真顔になり)ごめん、

路子      いや…:てっちゃんなんか見て!出来損ないのラッパーみたい。

三人      (笑う)

路子      これ被ってみて、

哲央      ええ？

藍子      あ、これもこれも。

路子は哲央に近くにあったニット帽を被らせ、藍子は靴からサングラスを出し、かけさせる。ラッパーらしき(しかしまるで間違った)ポーズを取ってみせる哲央。三人爆笑。

藍子      似合わないわねえ!

路子      ラップしてよ、

哲央 えー、(といいつつノリノリで)×○×○サラララップだ×○  
路子 つまんねえ！

三人 (爆笑)

\*広満 エヘン、オホ、オホン、

隣室から広満の聞こえよがしな咳ばらい。三人は慌てて口を押さえ、布団に伏せる。

こらえるほどに可笑しく、声を潜めて笑う三人。

哲央 なにやってんだ、

路子 そっちがでしょ、

藍子 何時だと思ってるの、

路子 〃時前、

三人 (声を潜めたまままた笑う)

哲央 寝なさいよもう。

路子 ほんとよ。

藍子 修学旅行みたいじゃない？

哲央 〆年前だぞもう。

路子 どこ行ったっけ？

藍子 定番よ、奈良と……、

哲央 あれだよ、どこかの漁村。

藍子 漁村？

路子 そうそう、漁村で労働体験するってやつ。

藍子 へえ。

哲央 北海道の、

路子 羅曰よ。

哲央 羅曰！羅曰！あれ嫌だったなあ、民家に泊まらされてさ。

路子 生徒2、3人ずつあちこちの家に分けられてね。

哲央 三時のおやつに鮭とばが出るんだよ。自家製の。

藍子 ふーん……。

路子 朝から漁の手伝いして、

哲央 たたき起こされてな！底引き網の支度とか、

路子 え、そんなことしてた？

哲央 しなかった？

路子 女子はお弁当作りよ、漁師さんたちの。

哲央 そっちの方が良いよ。俺らなんか……、（藍子の視線に気づく）

藍子 ……。

路子 （強引に話題を戻し）奈良っていうと鹿ね、

藍子 いいのいいの。それで？

路子 いや、

藍子 続けて。今私、2人の歴史を見てるから。

哲央 ……そんなのないよ別に。

藍子 ねえみっちゃん。どうして、

路子 また質問だ、

哲央 え？

路子 さつきから藍子ちゃん、質問ばかり、

藍子 どうしてうちの夫じゃダメだったの？

路子 ……。

哲央 何を言ってるんだお前は。

藍子 だって（2人の格好を見て）お似合いよなんか、林家ペー・パー子  
夫妻って感じで。

哲央 （ピンクのスウェットを着てるので）俺だけだろそれ！大体、  
お前の格好だって、

藍子 さつきも可笑しかったな。ここでね、みっちゃんとあなたが  
向こうで喋るの聞いてたの。そしたらあまりにしっくりくるんだ  
もん。熟年夫婦の会話みたいっていうの？……正しいピースに  
収まった感じ。

路子 正しいって、

哲央 （笑い）子供じみたこと言うなよ。

藍子 え？

哲央 似たような格好してるからお似合いだ？仲良く喋ってるから夫婦みたいだ？お前、頭の中まで修学旅行の女子高生みたいだぞ。

藍子 ほんとだ。ごめん。

哲央 もう寝よう。学生ごっこはお終いにして、

藍子 (路子に)好みじゃなかった？

哲央 聞いてないのか、

藍子 頼りたくならなかった？お父さんの介護で大変なとき。

路子 え、

藍子 心揺さぶられなかった？この人があんなに馬鹿みたいに熱心に通って相談に乗ってたのに、  
いいかげんにしろ！

路子 てっちゃん、シート、

哲央 あごめん……寝るぞもう。いいいの？

路子 あ、うん。

藍子 私シャワー、

哲央 いいそんなの。

藍子 でも、

哲央 お休み。

哲央は構わず電気を消す。左側に藍子、右側に路子、真ん中に哲央で横たわる。

藍子 この並びで寝る？

哲央 ……(舌打ち)、お前真ん中行けよ。

ごそごそと移動し、布団に並んで横たわる3人。

路子 ……おやすみなさい。



沈黙。

藍子 知りたくないの？みっちゃんの気持ち。

哲央 シッ、

藍子 ……聞くのが怖いの？

哲央 ……待て待て待て。

電氣をつける哲央。

哲央 俺を試してるのか？

藍子 え？

哲央 だからここに来たのか？お前が来ようって言ったんだろ。  
避難所は嫌だから近くのホテル泊まるうってタクシー呼んでる  
隙に、お前が勝手に彼女んち電話したんじゃないか。

藍子 ……。

哲央 どうしたかったんだ？家がなくなるかどうかって時に、  
俺が浮気すると思ってるのか？

路子 そんな、ちよつと昔の話聞いただけよ、

藍子 そうよ、昔話。

路子 ね。

哲央 どうかしてるよまったく…。

哲央、電氣を消す。沈黙。

藍子 ……昔がいつかって定義にもよるわね。

哲央 (うんざり)お前さあ、

藍子 学生時代か、団地に住んでた頃か……この人が手術したときも  
昔に入る？そう、ちよつどお父さんが亡くなった時よ、  
みっちゃんの。

路子 え？

藍子 そうなの、ちょうどあの時だったのよ。何で教えてくれなかったのってみっちゃんいったけど、心配かけたくなかったのよね。

路子 (起き上がる)

哲央 藍子、

藍子 だから内緒にしたんでしょ？知ったらもう前みたいに頼ってくれなくなると思ってた。驚いちゃうわよ、この人にそんなプライドが残ってたなんて。私や有季の前じゃ手術したくないってメソメソしてたのよ？

哲央 いい加減怒るよ、

藍子 とつくに怒ってるじゃない。でも言うておくべきだったわよ、命の恩人なんだから。

哲央 なんだって？

藍子 みっちゃんがよ。

哲央 (電気をつけ)お前は何か言いた……わあっ！

いつものまにか広満が部屋の中にいる。

広満 ああどうも。

哲央 ……すいません、うるさくして……、(電気を消そうとする)

広満 いいですよもう、起きてますから。

哲央 ……(藍子を咎め)寝れないよこれじゃ。便所借りる。

広満 あ……、

哲央は儼然としながらトイレの方に出ていった。

広満 ……私が行きたかったんですがね。

藍子 すいません。

路子 藍子ちゃん、

藍子 うん？

路子 恩人って何？

藍子 命の恩人。

路子 私が？

藍子 聞いてくれる？手術ん時のこと。

路子 うん。

藍子 題して、「窪居家の奇跡と、その真相について」。

広満 いいタイトルですな。

藍子 あ、まだいたんだ…。

路子 聞きたい。

藍子 …狭心症が悪化して、冠動脈のバイパス手術をしたんだけどね。

路子 うん。

藍子 脳梗塞とか、合併症のリスクも不安で最初はあの人渋っててもまあ、あれこれ説得するうちにある日決心してくれたっていうのがさっきの有季の話。

路子 うん、

藍子 手術が終わってあの人が目覚めたときは、家族三人抱き合って泣いてさ。あの人もやっと生きる希望が見えてきたから明るくなつて…まさに、

広満 愛が起こした奇跡と。

藍子 それです。思えば一番良いときだった気がする、私たち夫婦にとって。グツと絆が深まった気がしたもの…私は毎日病院通って、一緒に病室で映画見て。有季がロコロ借りてきてくれたの、昔の映画とか、ソコとかいろいろ。絶対自分じゃ借りないような物もあつてさ、でも見たら案外気に入ったりしてね。なんだったかなああれ、狸が宇宙戦争する奴。

路子 狸？

藍子 (笑って)おかしいでしょ。しかも狸の相棒は木よ！(笑い)  
変な映画、

広満 「ガーディアンズ・オブ・ギャラクシー」ですな。

藍子 え？ああ…、

広満 ちなみにアライグマです。

藍子 (いつまでいるの)……とにかくね。そんなこんなで無事退院って

なったときに、病室の片付けしてたら……あの人のケータイに留守電が入ってたの。普段は気にしないのよ？勝手に見たりもしない、ほんとよ？ただその時はなんか……相手が、

広満 みつちゃんだ。

藍子 ……あのお手洗いは？

広満 待ってます。

藍子 ……。

路子 私の電話？

藍子 お父さんが亡くなったって知らせ。

路子 あ……。

藍子 「」無沙汰してます、てっちゃんにはお世話になったから知らせます」ってやつ。なんてことない、みつちゃんにとっては至って普通の連絡よ。でも私には違った。あの人にとっても。

広満 特殊な隠語が隠れて、

路子 (広満を手で制して黙らせる)

いつの間にか哲央が戻ってきて、話を聞いている。

藍子 ……数ヶ月前の留守電を、消さないで取ってあったのよ。消し忘れた？絶対違う。だって忘れもしないよ、その電話があったのは、

哲央 (藍子に近づき)なあ……、

藍子 あなたが手術するって決めた日だから。

路子 (哲央を見る)……。

哲央 ……。

藍子 なるほど！って。思っちゃったわよはつきいって……有季は私の説得が効いたなんて言うけど、じっさい私は不思議だった。あんなグズグズいってたのに、突然前向きになったのは何故？って。久々に電話くれたみつちゃんの、お葬式来てくださって

一言が、この人を死ぬ気で生きる気にさせたの。

路子 藍子ちゃん……。

藍子 なーるほど！ザ！ワールド！って感じよ。でもお葬式は結局行けなかったから、もうみっちゃんに会いに行くきっかけもなくて、ぎ・まーみる・ザ・ワールド！って感じ！

哲央 していないよ、

藍子 ……、

哲央 していないよ本当に俺、不倫なんて。

藍子 わかつてる。

哲央 する気もなかったし、

藍子 そういうことじゃない。

哲央 なにが、

藍子 そういうことじゃないの。

哲央 え？

藍子 そういうことじゃないのっ！（顔を覆う）

哲央 ……。

広満 そういうことじゃないね。

哲央 あんた関係ないでしょ！

広満 便所は、

哲央 行きたければどうぞ。

広満 流しました？

哲央 え？

広満 流しました？音聞こえなかったんで。

哲央 そんなねえ……、

流してなかったことを思い出し、憤りを隠してトイレに行く哲央。  
トイレの流水音。

広満 炎が見えなくなりましたな……煙も減ったようだ。ほら、ウエストランドの看板が見える。

藍子 (窓の外を見る)

路子 ほんとだ。

藍子 何も言わないの？みっちゃん。

路子 ……

藍子 みつともないと思ってる？

路子 ……。(首を振る)

哲央、戻ってくる。

哲央 なあ、藍子俺はさ。

藍子 火が消えたみたい。

哲央 え？…ああ。

広満 建物が真っ黒だね。

路子 屋上の観覧車も。

藍子 どうしてあんなに明るいの？夜なのに。

路子 きつと消防車の明かりよ。

哲央 ニュース聞こうか？

藍子 ……

広満 以前トルネードに遭遇したときにね、

哲央 聞きましたよその話は。

広満 (構わず)家を吹き飛ばされた宿のオーナーとは、その後手紙のやりとりをするようになりましてね。で、あるとき、ついに新築の家が建ったと写真を送ってくれたんですが…プールつきのお邸か、はたまた宿と繋げて大きくするか。ワインセラーも欲しいなんて言ってたなと写真を見たら…まったくの想像外。さて、どんな家だったでしょう？

哲央 ……さあ。別にどうでも、

広満 小さな家が二軒、建ってたんです。オーナーの家と奥さんの家が、別々に二軒、広い敷地の端と端にね。

藍子 え？

広満 いやあ、そんな選択もあるのかと、感心しましたよ。

広満、トイレに去る。

哲央 ……何が言いたいんだよ！オイ、なんの教訓だ？

路子 てっちゃん、

哲央 ばかげてるよな？みっちゃん。

藍子 なにが。

哲央 こんなやりとり全部。お前が言ったことも。ばかげてるよ、まったくばかばかしいよ。

藍子 そうかしら。

哲央 そうだよ。俺が誰のおかげで手術できたか？誰の言葉で生きる気になったか？バカ言うな。俺が決めたんだ、俺の意思で生きてるんだ、そんなくだらない憶測を話すためにここへ連れてきたのか。もしお前の想像通りだったら、どうぞこれからはみっちゃんと一緒に置いていくつもりか。じゃ行き場のない男たちの吹きだまりだな、みっちゃんちは！

路子 てっちゃん、

哲央 (懺然としたまま) ああごめん、

路子 痛いのか？

哲央 え？

いつの間にか無意識に哲央は自分の胸を押さえている。

哲央 いや……、

藍子 (駈け寄り) ね……あなた大丈夫、

哲央 うん、

藍子 苦しい？

哲央 癖で触っただけ。

藍子 横になって、

哲央 何でも無いから、

藍子 でも、

哲央 いいよ……(藍子が触ろうとするのを払い)やめろって！

藍子 ……

哲央 何がしたいんだよ、お前。

藍子 ……え。

哲央 怒らせたり心配したり。守りたいのか？それとも壊したいのか。

藍子 壊すって。

哲央 ……

藍子 ……わかんない……自分でもわからないの……。

遠くで救急車のサイレンが聞こえる。哲央は窓を開ける。屋外の音が飛び込んでくる。

藍子 待ってあなた、

哲央 や、どこにも行かないよ。ベランダだから。

藍子 (やや拍子抜け)ああ……。

哲央 ……どこも行けないだろ。

藍子 ……

路子 あっ。

路子はハッとしたりのように隣室の方を見る。

哲央 ……家がなくなったら、お前も別の家を建てるか。

藍子 ……

哲央 だったら……俺たちとっくに壊れてるんじゃないか？

藍子 ……



哲央はベランダの外へ出て行った。路子は隣室に近づいていく。

藍子 みつちゃん。

路子 ……。

藍子 どうかしたの？

路子 今、音がしたでしょ、

藍子 わかんない。なに？

路子 父さんのおばけ。

藍子 へっ、

路子 父の気配がするの。死んだら生きてたときより、気配が濃くなつた気がする。

藍子 (怯えつつ笑い)やあだ、変なこと言わないで、

路子 ほんとよ。あそこで死んだのよ父。だから私、あっちに長くいられないの。一緒に行ってみる？

藍子 いや、いい、いい。

路子 (藍子の手を取り)付き合つてよ藍子ちゃん、

藍子 ちょっとやだやだ、どうしたのみつちゃん。

路子 ……私藍子ちゃんの気持ちわかる。私の留守電聞いて、どんなに傷ついたか。

藍子 ……。

路子 私も傷つけられたから。

藍子 え？

路子 父さんにね。私がどんなに寄り添っても尽くしても、父は別れた母を思って生きてた。

藍子 ……そうなの。

路子 愛する人が自分のために生きてるんじゃないってこと。自分はこの人の生きる糧にはならないってこと。藍子ちゃんもそんな気がしたんでしょ？

藍子 ……。(こみ上げるものを抑える)

路子 私もそう。言葉が喋れなくなっても視線で母を探す父が恨めしかった。私が結婚しなかったこと、ずっとこの家にいたこと、そんな全部を裏切られるような気持ち。

藍子 (頷く)……

路子 だからある日突然手放したくなった。もういらなくなって思ったら、父さん死んじゃった。

藍子 みつちゃん。

路子 でもね藍子ちゃん。それって本当は愛なんかじゃないのよ。

藍子 え、

路子 愛じゃなかったの。自分の頑張りに気づいて欲しかっただけ。費やした時間に見合う対価が欲しいだけ。これまでの二人の時間に、人生に、意味があると思いたいだけ。あなたもそうでしょ藍子ちゃん。(藍子の腕を握る力がこもる)

藍子 いた、

路子 何で私のために生きてくれないの？何で感謝してくれないの？あんたそう思ったでしょ？

藍子 みつちゃん、

路子 こんなに頑張ってるのに。こんなに近くにいるのに！

藍子 ちよつとみつちゃん、

路子 わかってくれないならいい、死んじゃえばいい、

藍子 思っけないそんなこと、

路子 思った、

藍子 思っけない私は！

路子 私は思った！でも間違ってたよ……！！

藍子 ……みつちゃん、

哲央 (二人の異変に気づいて窓を開け)どうした？

路子 愛じゃない……。

藍子 ……うん。

路子 それは自分のプライドで、勝手に積み上げた、意地だったのよ。

哲央 おい、

藍子 (抱き留めて)

路子 愛してたのに……、

藍子 わかった……わかったよ。

哲央が窓の向こうでなにかに気づき、張り詰めた声を上げた。

哲央　　おい……来てみる！崩れるぞ！

藍子　　え、

哲央　　看板のとこ……ウエストランドが、

藍子　　あつ、

藍子は窓を開け、ベランダに飛び出していく。遠くで静かに、だが確かに、なにかが崩れる地鳴りのような音がする。

哲央　　ああつ、

藍子　　ああ、

哲央　　ああ……、

藍子　　ああ……、

声にならない嘆声をもらしながら、互いにしがみつくように身を寄せ合う藍子と哲央。

部屋の中にいる路子も、戻ってきた広満も窓の向こうを見る。路子はまた、隣の部屋を振り返った。

## 最終場 「荒れ野」

薄もやのかかるテラス窓から朝の陽が差し込んでいる。だが西向きの窓らしく、さほど明るくはない。ベランダで広満が外の様子を見ている。布団には、哲央が二組分の布団を占領する寝相で眠っている。キッチンの方からケン一と、続いて有季が入ってきた。窓の向こうにいる広満を見て、立ち止まるケン一。

有季 (哲央を見て)寝たんだ結局。

ケン一がベランダに行こうとすると、有季は、ケン一の手を掴む。

有季 また忘れて良いからね…今日のこと。

ケン一 ……。

有季が手を離すと、ケン一は哲央をまたぎながらベランダへ出て行く。有季も部屋の隅に置いていた鞆を取りに行くが、またいだ拍子に哲央の足を踏んでいく。

哲央 イッ、

有季 あごめん。

哲央 (舌打ち)なんだお…x▲@(言語にならない文句)…、

有季 (隣室を覗き込み)おはようございます。

\* 路子 おはよう。

有季 寝てないんですか？

\* 路子 ちよつと寝た。

有季 お母さんは…、(路子がキッチンを指したらしく、キッチンを  
見る)

路子が隣室から出てきてキッチンの方へ向かう。

路子 お腹空いてる？

有季 や、鍋もたれてて。

有季は哲央の横に座り、鞆からケータイを取り出してラジオをつける。  
寝そべったまま気持ちよさそうに大きな欠伸をする哲央。

有季 うるさい。

哲央 …どこいたのお前。

有季 上。

哲央 ふーん。

ラジオから情報番組が流れる。有季は鞆から化粧ポーチを取り出し、メイクを始める。広満がベランダから入ってくる。

有季 (広満に)おはようございます。(メイクしながら)職場に電話した？

哲央 んー？

有季 9時前だよ。

哲央 えっ、(ガバリと起き上がる)

広満 お目覚めですかな。

哲央 しまった…。

有季 わかってくれるよ事情。

\*路子 大丈夫藍子ちゃん？

有季 (キッチンの方を見て)二日酔い？

広満 のようだね。

\*路子 薬飲む？

藍子 いい？

\*路子 ちょっと待ってね。先生ー、藍子ちゃんにお薬出してー。

広満 はいはい。

藍子が頭をもたげながら入ってくる。

広満は棚の引き出しを開ける。引き出しからはみ出んばかりのたくさんの薬袋が見える。

有季 大丈夫ー？

藍子 (適当に相づち)

哲央 俺の電話どこだっけ。あ…ゲロかったんだ…。(布団に倒れる)

広満 えっとどれがいいのかな…。

有季 すごい量ですね、薬。

広満 薬剤師さんだから。

有季 路子さん？そうなんだ。

広満 ラシックスか、アルダクトンか…、

有季 それ処方箋いる奴じゃないですか？

広満 (指を鉤のように曲げて見せ)これだよこれ。イリーガル。

有季 (笑って)うそお、

哲央 (藍子に)電話貸して。

藍子はぼんやりと広満が薬の引き出しを漁るのを見ている。

哲央 藍子、

藍子 え、

哲央 ケータイ。会社に電話するから。

藍子 鞆に。

哲央 (行こうとする)

藍子 あ、充電切れてるよ。

哲央 …。(布団に倒れる)

エプロン姿の路子が入ってくる。

路子 薬わかった？（広満が持っている薬を見て）あーそっちじゃなくてね、ラシアールがいいよ。

広満 俺ももらうよ、いつもの。

路子 はい、藍子ちゃん。

藍子 ありがとう……。

路子 お味噌汁飲んだらスッキリするよ。（ブランダにいるケン一に）ケンちゃん手伝って、

有季 私のケータイ使う？

哲央 ニュースは。

有季 やつてない。後で「Twitter」見る。（ラジオを切って渡そうとする）

広満 火元はガスストーブだそうですね。

有季 え？

広満 イベント広場に置いてたストーブが、仮設テントに引火したらしいよ。

藍子 ニュース見たんですか？

広満 いや、新聞に。（どてらの内側から新聞を出し）

藍子 あ、

哲央 ちょっと見せて。

有季 私も見たい。

哲央が新聞を広げると、全員が困んで覗き込み、記事を読む。

藍子 （写真を見て）うわあ……、

有季 （記事を読み）まだ燃えてるって！

藍子 え、

広満 いや朝刊だからね。遅くても深夜一時くらいの情報だよ。

有季 あそつか。

ケン一 放火じゃないんや。

路子 やだ、

有季 私もそうだと思ってた。

藍子 犠牲者は？

広満 この時点じゃまだいないようですが。タベのあれがあるから、

有季 あ、見た？！看板のとこ、ガラガラって(崩れた)、

路子 見た見た。

有季 (ケン一に)ね？

ケン一 (突如立ち上がり)ゴゴゴゴゴッ！バガン！っちゅって、でっか

いビスケットみたいな建物が、

広満 (諫めて)ケン一落ち着きなさい。

藍子 にしても…すごい写真ね、これ…、

有季 ここどっかって感じ。

藍子 ここから見るのとじゃ全然違うわね。

路子 ほんと…。

藍子 (哲央が黙っているの)あなた？

哲央 …。

有季 ……こりや、無理だな。

路子 え？

有季 残ってないようち。(写真を指し)この辺みんな焼けてるし。

藍子 美香子ちゃんに電話した？

有季 (首を振り)……知りたくない。

哲央 ウツ…、

それまで険しい表情で紙面を睨んでいた哲央が突然息を詰まらせ、俯いた。哲央の背を撫でる有季、肩をふるわせる哲央。



広満 見に行つて来なさいよ。

哲央 ……。

広満 箱を開けなきゃ分らない。今はまだ、シユレディングアの猫だ。

有季 猫？

藍子 ……そうね。見に行く。

路子 じゃ、朝ごはんでも食べて、

藍子 ううん、もう行くわ。

路子 ……そう。

藍子 服つて…、

路子 はいはい、

藍子 あなた、

哲央 ……。

路子 (服を渡して隣室を指し)あつちで着替えて。

藍子 ありがとう。(有季に)お布団。

路子 (広満に)お布団いい？朝ごはんいるでしょ？ケンちゃん手伝つて。

藍子が動き出したのをきっかけに、それぞれ新聞から離れて動き出す。藍子と広満は布団をたたみ、路子とケン一は台所へ。有季は帰り支度をする。哲央だけがまだ新聞を見ている。

有季 お母さん、私もう出る。

藍子 先行くの？

有季 うん、会社行つてくる。

哲央 え？

藍子 会社つて、

広満 (パチンコを回す仕草で)これかい？

有季 違います。前の会社。

藍子 どうして。

有季 ……一度、ちゃんと謝つて「よう」と思つて。課長とか。

ケン一 お、

藍子 今日じゃなくても、

有季 うん、後で電話するから。

藍子 ……わかった。

有季は鞆を持って立ち上がる。哲央はベランダに出て行くこととしている。

有季 あとでねお父さん。

哲央 ん。うん…。

有季 おとうさんっ、

哲央 うんって。

有季 なるようになるさ。

哲央 ……。

哲央はベランダに出て行く。

有季 お邪魔しました。

広満 はい、私のうちじゃありませんがね。

有季が出て行くことになると、ケン一も台所へ向かう。

有季 あ。

ケン一 んじゃね。

有季 (抱きしめ)ケンちゃん、またね。

広満 お。

有季 (広満に)妬きました？

ケン一 やかんよ。

有季は台所へ向かうケンーを追うようにして部屋を出ていく。隣室で、チー  
ンとリン棒が鳴る音。広満は音のした方を見る。

\* 路子      あらもう行っちゃうの？

\* 有季      また遊び来ていいですか？

\* 路子      もちろん。

\* 有季      それじゃまた、

\* 路子      気をつけて。

隣室から藍子が戻ってくる。

広満      線香の良い匂いだ。

藍子      勝手に良かったかしら。

広満      困るといふ人はおらんでしよう。死んでるし。

藍子      (笑い)：みっちゃんのお父さんで、どんな最期だったんですか。

広満      さあ。私まだ、ただの上の階の人でしたから。

藍子      ああそうか。

広満      しかし長患いの割に、案外亡くなるときはアツという間だった  
そうですよ。薬が合わなかったとか、みっちゃん言ってたな。

藍子      薬。

広満      ええ、新しい薬に替えたばかりだったんですって。

藍子      ……。

藍子は開きっぱなしになった薬の棚を見つめる。路子が水の入ったグラスを  
持ってくる。

路子      藍子ちゃん、お薬飲んだ？

藍子      え：ああ、ありがと。(グラスを受け取り、薬を飲む)

哲央      (ベランダから顔を出し)もう行くのか？

藍子 うん。

哲央 そうか、

藍子 あなたも早く……、

哲央 ……………、

藍子 ……あなたの好きにしているのよ。

哲央 ……。

藍子 私、見てくる。

哲央 ……怖くないか？

藍子 ……それでも、知りたいの。

藍子は鞆を持つと、路子に向き合う。

藍子 みつちゃん。

路子 藍子ちゃん。

手を握り合って別れ、藍子は部屋を出ていった。ケンーが台所で歌っている。

嫌われてしまったの 嫌する人へ

捨てられてしまったの 解くずみたいに

鉄扉が閉まる音。

路子 てっちゃん。

哲央 うん……。

路子 朝ごはん食べない？

哲央 ……もらおうかな。

哲央はペランダから部屋に戻ると、積まれた布団の傍らに腰掛けた。キッチンに戻っていく路子は、ケンーの歌に合わせて歌う。

わたしのどろがいけないの それともあの人が変わったの

広満も台拭きでコタツの上を拭きながら歌う。哲央はそんな一同を眺める。

残されてしまったの 雨降る野に

寂しみの目の中を あの人が逃げる

食器を並べに、路子とケン一が部屋を行き来する。天板のずれたコタツを直しながら、哲央も小さく歌を口ずさむ。

あなたならなんにするの あなたならなんにするの

泣くの歩くの死んじやうの

あなたなら あなたなら

了